宮尾登美子 生誕一〇〇年記念

生きてゆく力

宮尾登美子 生誕一〇〇年記念　生きてゆく力

高知県立文学館

高知県立
文学館

2 120001 109002

生きてゆく力

宮尾登美子

生誕一〇〇年記念

Tomiko Miyao : 100th Birth Anniversary

目　次

ごあいさつ……高知県立文学館 館長　織田 敦子　2
生誕一〇〇年展に寄せて「楊梅」……山本一力　3
第一章　宮尾登美子　その前半生……5
第二章　大河小説の世界～自伝的四部作と周辺作品……25
第三章　女性の生き方をみつめて……41
第四章　めぐる季節を生きて……49
宮尾登美子 年譜……54
出版目録（小説）……61
映像化・舞台化された宮尾作品……65
宮尾登美子文庫資料（草稿、ノート）……66

表紙／作家・宇野千代から贈られた
宮尾登美子愛用の着物
※全体写真は53Pに掲載

ごあいさつ

２０２６年は高知市出身の直木賞作家・宮尾登美子の生誕一〇〇年の年にあたります。

大正末年に生まれ、昭和10年代に青春時代を過ごした宮尾登美子。戦前の女性を取り巻く時代背景の中にあって、芸妓娼妓紹介業という家業や父親、教師への反発、満州での過酷な難民体験、農家での暮らしなど、若き日のこれらの体験は宮尾文学の原点であり、創作の源となるものでした。

「人の心を打つ作品を生むのには、自分自身血を流し、痛みに耐えながらその姿を人前にさらす勇気がなくてはならぬ」という覚悟のもと、劣等感の根源でもあった生家の家業を題材に書き上げた『櫂』で太宰治賞を受賞。作家として花開く出世作となりました。

昭和・平成を代表する大作家となった宮尾登美子が自身の命題として課したのは「女性の一生を描く」ということ。「女性の生き方というのは、その時代に反映されるものです。それは戦前であろうと戦後であろうと、現代でも同じ。与えられた環境のなかで粘り強く、より良い方向を目指していく」そんな女性の生き方を見つめ、一人の女性の生涯を丹念に描いた作品の数々が多くの読者に支持されてきました。

当館では、生誕一〇〇年を記念して「生誕一〇〇年記念 宮尾登美子展～生きてゆく力～」を令和８年４月11日(土)～６月28日(日)まで開催し、当館収蔵資料を中心に一堂に展示。昭和10年の高知市の地図に自伝的四部作に登場する舞台を落とし込んだ地図を作成した他、新収蔵資料として宮尾登美子の父・猛吾の日記の展示など研究調査発表の機会となり、地元高知はもちろん、全国各地から宮尾登美子ファンの皆さまにご観覧いただきました。

この度、さらなる調査研究の成果を踏まえ、生誕一〇〇年を記念する図録を発行する運びとなりました。生誕一〇〇年展開催ならびに図録制作にあたり温かいご理解とご協力を賜ったご遺族をはじめ、ご協力いただいたすべての皆さまに深く御礼申し上げます。

令和８年９月　　高知県立文学館 館長　**織田敦子**

生誕一〇〇年展に寄せて　「楊梅」

山本一力（作家）

２００４年９月に創業１００周年を迎える高知新聞社の計らいで、同年４月に宮尾登美子姐御（以下、姐御）との胸躍る初対面がかなった。

わたしは会食場所に正座し、56歳の男が心拍数まで上げて、全身をがちがちに固くしていた。

入室された姐御は、季節を感じさせる色柄の和服だった。

差し込む春の陽光が、姐御の見事な着こなしに感ずるところがあったらしい。部屋が明るくなった。

呼吸すら難儀な様子のわたしと目を合わせるなり、「おまさん、今日から舎弟やき」と、のたまわれた。

年長者から「おまえは舎弟」と認めてもらえるのを、わたしも土佐人男子の誉れとする世代だ。

しかも姐御は、わたしのこわばりを溶かしてくれた、親しみに溢れた物言いである。

「ありがとうございます」

思いを込めて礼を言い、あとを続けた。

「いまから姐御と呼ばせて戴けますように」

姐御は返事の代わりに笑みを浮かべて承知のうなずきを示してくださった。

歓談は止まるを知らず、たちまち会食はデザートへと進んだ。季節の水菓子を賞味しつつ、高知新聞東京支社長が

「あとひと月もしたら、気の早い楊梅が日曜市に出てきますろう」

あのときは姐御を含む場の全員が、『櫂』の冒頭を想い浮かべていた。

会食後、帰宅する地下鉄内で、まだ20代前半だった時分の、ある出来事を思い返した。

旅行会社勤務だった、6月のある日。

憧れを抱いていた女性先輩からランチに誘われた。人気の麻婆豆腐を食べながら、先輩から問われた。

「高知県出身のヤマモトくんなら、楊梅って知ってるでしょ？」

「知らいでか！」

周りが振り返ったほどのオオゴエで、土佐弁で答えたら

「宮尾登美子の『櫂』の始まりから何度も出てくる楊梅って、どんな味なのかなあ」

いま女性社員の間で、『櫂』が人気だが、楊梅をだれも知らないと先輩は結んだ。

季節は6月、まさに楊梅は短い旬だった。

「手配します」

言い切ったあと、土電会館一階の我が社高知支店に電話し、手配を頼んだ。

間のいいことに、土電会館地下の果実店に楊梅があった。

あの時代は航空貨物でも、高知～東京間は二日を要した。

「今日の終業後、4階の会議室にみんなが集まるから、ヤマモトくんから食べ方を教えて」

なんと『櫂』を読んでいる20～30代の女性社員が6人もいた。

総務部、経理部、営業部、外国部、電話交換手など、部門も多岐にわたっていた。

旬とはいえ、楊梅は甘酸っぱいし、掴み方次第ではすぐに潰れるほどにか弱い。

「まるで小説のなかの女性たちみたい」

「課長にじくじく言われてげんなりしていたけど。楊梅の味と彼女たちを思ったら、めげてた気分がどこかに吹き飛んだ気がする」

男がひとりくわわって居ることなど気にもせず、6人の女性は姐御の世界とわが身とを重ね合わせていた。

姐御はまぎれもなく、土佐の女である。

軽々にはめげず、さりとて芯の強さを誇らず、真正面から向かい風のなかを進む背筋の真っ直ぐな生き方が、女性のみならず男をも魅了する。

今年もまた、楊梅の旬が近づいてきた。



平成16(2004)年4月　加賀料理の料亭・浅田にて

山本一力さんはこの対談で得た宮尾からのアドバイスと出会いが代表作「飛脚シリーズ」第1作『かんじき飛脚』の誕生につながった。

第一章

宮尾登美子　その前半生

大正最後の年となる大正15（１９２６）年4月に生まれた宮尾登美子は、没後十年以上たった今も多くのファンを持つ、昭和・平成を代表する作家ですが、作家として花開いたのは40代後半で、同年代に活躍した他の女性作家と比べても遅咲きの作家だったと言えるでしょう。

宮尾登美子という作家を見つめるとき、その前半生がとても重要な意味を持ちます。

父親の商う芸妓娼妓紹介業という家業への劣等感が芽生えた少女時代、17歳で親元を離れて単身赴いた旧池川町での助教時代、夫に従い、幼い娘を連れて渡った満州・飲馬河、そして敗戦後の悲惨な難民体験。それらを乗り越えて夫の故郷の農村で暮らし、昭和22（１９４７）年、結核に罹患したことを機に書きはじめたノートはやがて小説へと発展していきました。昭和37（１９６２）年には女流新人賞を受賞するものの、そこからはじまった苦悩の10年間をもがき、ついに到達した作品が46歳のとき私家版として出版した『櫂』でした。

宮尾は、『櫂』を皮切りに、劣等感の根源である家業にまつわる作品や自身の引揚げ体験、農村での生活などを文学として昇華し、自身の半生を題材に優れた作品群を発表していきました。

第一章では宮尾の前半生を、資料や宮尾自身のエッセイを中心に紐解きます。



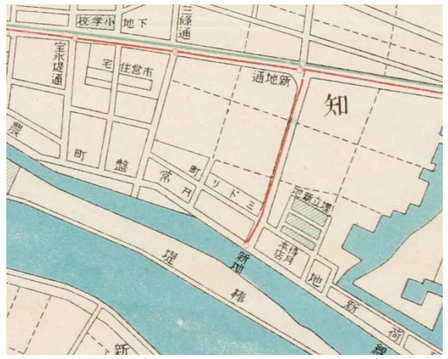
写真提供　朝日新聞社

誕生〜少女時代

大正15（1926）年4月13日、高知市緑町4丁目（現・二葉町）に生まれる。戸籍上は父・岸田猛吾、母・喜世の三女。

父の猛吾は芸妓娼妓紹介業を営む。

母・喜世とは生さぬ仲であったが、母の深い愛情に包まれて育った。



昭和4（1929）年の高知市街地図　片桐開成社発行
高知市立市民図書館所蔵 貴重書

常盤町の右上に「ミドリ町」の文字が見える。「緑町」というのは地域住民の間で使われていた通称。



5歳　次兄の結婚式で



昭和9（1934）年頃、桂浜にて／岸田康彦氏提供
右端の男性が次兄・英太郎で、抱かれているのは兄の子で甥の康彦。
中央、立っているのが宮尾。胸には級長バッジが光る。



紹介人名詳細筆記簿
猛吾が記した昭和14（1939）年から昭和19（1944）年12月までの芸妓娼妓紹介業の詳細な記録。

兄は十八も年上、父には兄妹がなく、母方のいとこたちも皆二十以上年がちがうとあれば、まわりから子供の私が珍しがられるのは当然だろうが、昔を振返って私は大人たちがただうっとうしく、ときに恐しかったという記憶しかない。私にとって、ときどき十人以上にもなる寄食人のいるざわざわした家のなかで、心から信頼できるのはやさしい母より他になく、母から片時でも離れると泣きわめいてまわりをてこずらせたと、これは昔を知っている人たちが今でもいう。

私は「牛の子」とあだ名をつけられ、朝から晩まで母の着物のたもとにしっかりとぶら下り、母屋から離室までの狭い中庭までも始終ついて歩いた。こうしていると、無遠慮な大人たちの冗談や、遊びに連れてってあげようという誘惑や、女中たちが母に隠れてするちょっとした意地悪などの危害からすべて母が庇ってくれるという安心感があったし、それに病弱でしょっちゅう入院していた私が、熱の高い夜半ふと目をあけると、帯も解かないままの母がいつもじっと自分を見守ってくれていたことなども、よりいっそう母の腰についてまわる心のよりどころとなっていたように思う。

母もまた子可愛さから私のいう通りにし、小学校も三年までずっと添寝してくれたばかりでなく、六年になってもまだ食事のときには必ずわきにいて熱いものは口でふいてさまし、魚は小骨をとり、などのこまかい世話をしてくれたが、当時父のほとんど留守がちな家にあって、こうすることによって母も一つの生甲斐をみつけていたものかもしれなかった。

（「母のたもと」『母のたもと』より）

私が家の職業の卑しさを子供心に知ったのはいくつのときだったろうか。確か小学校二年の春、受持ちのY先生の家庭訪問の際に私が自分の家へ案内していたとき、

「あ、あそこね。看板が見える」

とおっしゃったその一言が最初だったように記憶しているが、このとき少しも悪い印象でなかったのは、Y先生が日頃私にとくに目をかけていて下さったせいもあったかと思える。しかも先生はただ看板がある、とおっしゃっただけで、職業については何もおっしゃりはしなかったから、多分私は、このとき初めて自分で自分の心のなかに恥の感覚を見つけたという事だったろう。

振り返って小学校時代、この悩みがさして深刻でなかったのは無論まだわけの判らぬ子供だった理由が大きいが、他にこの小学校が花街のなかにあって私だけ目立たなかったのもそれを助けていたのかも知れない。

（「ことばの重み」『もう一つの出会い』より）



宮尾が通った昭和尋常小学校（現・高知市日の出町）
昭和14（1939）年3月27日卒の第7回卒業生の名簿に岸田登美子の名を見つけることができる。
昭和小は、昭和7（1932）年4月、第五小、下知小を合併して開校した。

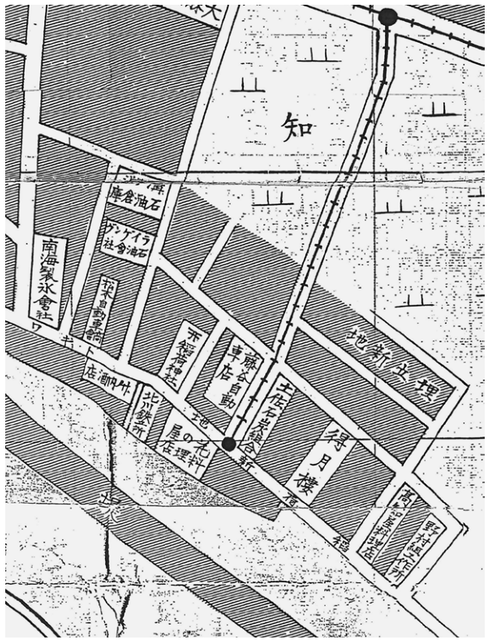


小学4年生のころ
父・猛吾と母・喜世が離婚したのは昭和13（1938）年11月、小学6年生の時のことだった。

私が母と実の母子でないことを知ったのはいったいいつ頃だったでしょうか。たぶん父と母との離婚に始まる家の崩壊の前後だったと思いますから、小学校四、五年の時期だったように思われます。いつ、どこで、誰からそれを知らされた、という確かな記憶がないのは家のごたごたのなかで自然に嗅ぎとっていたのではなかったでしょうか。

よく世間では、戸籍謄本を見て初めて養父母であることを知る子供の、大きな衝撃などの話を聞きますが、私は衝撃とは逆に、事実を知るとますます母の支えになってやらねばならぬ決意を固めたものでした。

（「母と子の絆」『もう一つの出会い』より）



大正15（1926）年版 高知市街図
商工社調査部発行／高知県立図書館蔵
地図右下の「高知屋料理店」とあるのが、8歳の時に引っ越した“海岸通りの家”。ここで12歳まで暮らした。

女学校時代

昭和14（1939）年、県立第一高等女学校を受験するも、不合格。
女子師範学校附属小学校高等科を経て、私立の高坂高等女学校の三年次に編入した。
女学校受験の失敗は、宮尾にとって人生の大きな曲がり角となり、家の職業を強烈に意識することとなる出来事だった。

決定的になったのは女学校の受験に失敗したときだった。私の小学校からは名門県立第一高女を十三人受け、落ちたのはこのなかで成績の下から二人と私との三人だったから、周囲は、

「あの子が落ちたのは家の職業のせい」

などとやかましく噂しそれを聞いた私は泣きながら家に帰って父に抗議したところ、

「職業に何の貴賤がある。自分の不作を人のせいにするな」

と大喝され、そういわれれば口頭試問の算術がいけなかった後ろめたさがあるために、それ以上強くはいえなかった。

このときは受持ちの先生のはからいで女子師範付属の高等科を受験して通ったが、第一高女が一・八倍のゆるやかさだったのに比べ、こちらは九倍だった。第一高女失敗の原因が人の噂通りだったとすれば、同じ県立でもこちらは職業など問わないだけの度量を持つ校風だったかどうか私には判らなかったけれど、私の感覚でいえばこの二年間はまるでおもしろくなかった。おもしろくないから成績も悪く、先生にも反抗すれば始終マークされ、そのマークのされかたは家の職業のせい、という目につながってゆく。

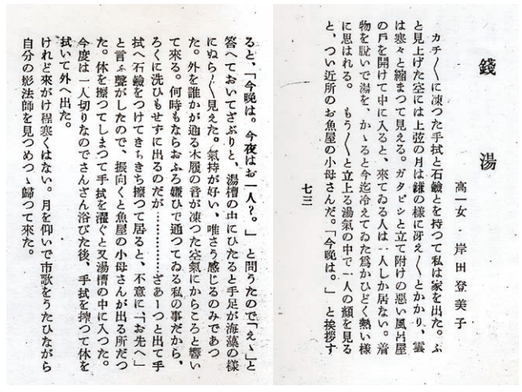
二年後、私は女子師範を受けず私立女学校の三年編入試験を受けたが、この頃からもう家の職業に対する認識はできていたから、先生の私に対する差別ははっきりと判った。

まず編入試験に一番だったにもかかわらず入学後級長にはならず、優等生名簿からはけずられ、卒業式の在校生総代、卒業生総代は稽古していながらいつも土壇場でおろされた。後年私の問題で職員会議がたびたび開かれた由を聞き、三十人近い先生のうち、私を支持したのはたった四人、という内容を知るに及んで、私の感情が激しく波立ったのは無理というものだったろうか。

（「ことばの重み」『もう一つの出会い』より）



文集『木屋』（複製）
高知県女子師範学校附属小学校
昭和14（1939）年12月発行
第一高女受験失敗後、女子師範学校附属小学校の高等科に進学した。



錢湯
高一女・岸田登美子

カチ〳〵に凍つた手拭と石鹸とを持つて私は家を出た。ふと見上げた空には上弦の月は鎌の様に冴え〳〵とかゝり、雲は寒々と棚まつて見える。ガタピシと立て附けの悪い風呂屋の戸を開けて中に入ると、來てゐる人は一人しか居ない。着物を脱いで湯を、かゝると今迄冷えてゐた爲かひどく熱い様に思はれる。もう〳〵と立上る湯氣の中で一人の顏を見ると、つい近所のお魚屋の小母さんだ。「今晩は。」と挨拶すると、「今晩は。今夜はお一人？。」と問うたので「えゝ」と答へておいてさぶりと、湯槽の中にひたると手足が海藻の様にぬら〳〵見えた。氣持が好い。唯さう感じるのみであつた。外を誰かが通る木履の音が凍つた空氣にからころと響いて來る。何時もならおふろ儘ひで通つてゐる私の事だから、ろくに洗ひもせずに出るのだが……ざあーつと出て手拭へ石鹸をつけてきちきち擦つて居ると、不意に「お先へ」と言ふ聲がしたので、振向くと魚屋の小母さんが出る所だつた。休を擦つてしまつて手拭を濯ぐと又湯槽の中に入つた。今度は一人切りなのでさんざん浴びた後、手拭を絞つて休を拭いて外へ出た。

けれど來がけ程寒くはない。月を仰いで市歌をうたひながら自分の影法師を見つめつゝ歸つて來た。

七三



昭和12（1937）年の出征風景
この年、日中戦争が勃発。
宮尾は戦時色一色に包まれた少女時代を送った。
（※参考写真『90 ふるさとの想い出写真集 明治 大正 昭和　高知』）



宮尾が通った高坂高等女学校の校舎
昭和18年の卒業写真帖より／高知県立図書館蔵
現在の愛宕中学校（相模町）の敷地にあった。
高知県女子師範高等科に2年通った後、高坂高女3年次に編入。
高坂高女は4年制のため、2年通い、昭和18（1943）年3月本科卒業。

『春燈』のころ（抜粋）

佐藤いづみ

私は宮尾さんが卒業する前年の秋、はじめて高坂高等女学校に勤めたものだから、会議中は隅っこに居て、黙って、先生方のお話を拝聴するという形でいた。

宮尾さんは四年生甲組。この組は進学組で意欲的・積極的・熱烈な生徒が集まり、主任の化学の教員高木先生は、後年、県立高校で私自身お世話になった、これまた生徒思いのすぐれた方であった。

卒業生代表、総代を決定する議題になったとき、岸田登美子の名は主任の先生から、また、一、二のかたから強い推薦と支持がなされた。

成績抜群の点、友人間にも好かれ無類の世話好き、信望のあること、送別の辞など、何ら指導なくして自力で作文はおろか、墨書も出来ることなど、賞賛に近いことばがあった。多芸多能、何でも可能、伸びのある生徒、県立高女生に決してヒケをとらぬ、という声もある。

が、ひとしきり、高まった後、急にひそまり返った空気になったのはなぜだったろう。

ひそひそ声になってしまったのはどうしてだったか。私がその声を聞きとれぬ場にいたせいか。やがて、対立候補者名があげられ、宮尾さんは議題から落ちた。

その宮尾さんたち四年甲組が中心となって、所謂、予餞会に劇をするという出した。私は新米の国語教師だったので、受け持ち組はなく、一・二年の授業を中心にしていたため、宮尾さんたちにとっては今日のクラブ顧問風に扱われていたといってよい。

「勧進帳―安宅の関」「鉢の木」そうして「藤十郎の恋」（菊池寛作）に決め、脚本・台本、また道具その他は宮尾さんが仕切った。

役柄もなかなかの適当な人物が決定。こんな上演才能はもとより、脚色能力の萌芽はもうすでに、このころからあった。宮尾さんの天成というものだろう。

ただ、何としても「藤十郎の恋」では当時の女学校として許されぬことで、「芸道精進」と私が改作して皆の賛同を得た。

「勧進帳」で宮尾さんは判官義経役。弁慶を演ずる岩崎さんとは親友でぴったりの役だった。富樫は片山さん。三羽烏と絶賛されたものだ。ややか細い宮尾さんの声帯も可憐。「鉢の木」では宮尾さんは常世ではなかったか。「芸道精進」ではお梶。藤十郎は弁慶役をこなした岩崎さん。すり寄る藤十郎に、たじたじだった宮尾さんのお梶が本ものの恋に変質し、やがて、偽りと知るや、自死を選んだお梶の現実を人々がロに呼ばう声に生徒一同大もりあがりで幕。

が、またこれは高年層の校長・教頭はじめ諸教員には、いわずもがな「藤十郎の恋」と知れ、上演中、中止の諸声が高かった由だが、ともかく、宮尾さんらはやりおおせた。三劇の自作を上演、宮尾さんらは友情と連帯感を一段と強くし卒業していった（私事だが、私はその三月、高坂を去り、公立に移った）。

（朝日新聞社版『宮尾登美子全集』月報2より）



昭和18（1943）年、卒業式の予餞会。
義経姿の宮尾（右）。



卒業式のあと。後列左から2番目が宮尾。

「心を打った男たち」（『母のたもと』収載）父、岸田猛吾について詳細に記したエッセイ。

富田岩伍、という名については、ご記憶の方もいらっしゃるかと思う。

拙作『櫂』と『岩伍覚え書』で主役をつとめ、『寒椿』では名を変えてときどき登場する男であり、また現実には、芸術座の芝居「喜和」では井川比佐志、テレビ「櫂」では伊藤孝雄がそれぞれ扮し、かなり具体的な姿を人前にさらしているからである。読者の方からもよく岩伍についてお手紙を頂くし、故郷高知では土佐人の短所をすべて象徴している男として語られることも多い。

私は至って寡作で、現在までにまだ四篇しか発表していないが、うち三篇までも岩伍に触れなければならない理由とは、心の深い部分で一致する。それは血のつながった父娘という関係以上に、娘である私の全生涯、生きかたにまで強い影響を及ぼさずにはおかない男だからであり、いまだに私は岩伍への憎しみ、怨み、憐れみの感情に呪縛され続けている自分を思うのである。

岩伍の本名は岸田猛吾、明治十五年、高知市材木町の材木商楠八の七男として生まれている。先祖は高知市八頭（やず）の庄屋とのことだが、没落したあとの岸田に生まれた私は系図のひとつ見かけたおぼえもない。ただ、父が自慢していたように、現在も五台山にある墓所だけは広くて、苗字のある家だけに許されたという屋根石つきの墓石は、苔むしたまま四十基ほど並んでいるから、昔はそれに似合った暮らしだったものであろうか。

楠八はばんばん育ちの新しがりやで、明治の断髪令以後、全財産をつぎこんで土佐橋に三階建ての土蔵作りを建て、ここで高級床屋を開業した。その頃土佐では床屋を「つみこ屋」と呼び、東京から技師を招いた三階建てのつみこ屋は大いに珍しがられたが結局商売にはならず、楠八の死と同時に破産したのだった。

楠八の子は、生まれては死に生まれては死にして、七番目の父だけがやっと育ったらしい。何でも変わった恰好をさせると育つということで、父は小さいときから土佐では珍しい洋服を着せられ、いつも女中の監視つきだったという。

家の破産は七歳のときだったが、生活力のない母親は子を親戚にさし出したため、父は親戚中をたらい廻しにされ、丁稚代りに使われた。小さいときからいたい放題に育てられたせいか、どの家でも父はこっぴどく痛めつけられたらしく、まもなく自分から望んで全く他人の米屋に住み込みの丁稚に入っている。

小学校へは二十七日間通っただけで止めさせられたから、全くの文盲で、米屋の掛け取りに行っても父は領収書一枚書けなかった。そこで自分から思い立ち、看板の字を写し取って来ては夜ひそかに手習いしているうち、隣家の弁護士がそれを知り、読み書きを授けてくれることになった。

明治の男というのは口数が少ないし、まして父・富田岩伍は女子供と語らいをするような人間ではなかったから、私は父の苦労を当人の口から聞いたことは一度もない。私が小説を書くに当り、ある程度その軌跡が掘り起せたのは、全部知人や古老の口からだった。

というのも、父は成人して母親と二人小さな借家に住むようになってのち、本業の煙草切りの仕事のあいまに博奕を慰むようになったということであった。私は少しも父をかばい立てするつもりはないが、明治も末年頃の地方都市の下町などでは、性に対する考え方もわりと自由だったし、また小博奕は青年の唯一の娯楽でもあったらしい。

父の場合は、激しい性格もあってそれが遊びで済まされなくなり、のちには度胸を買われて「火の玉の男」などと呼ばれ、土佐から遠くまで遠征に行くようになった。当然幾度も検挙され、父が払った罰金の高は関西一だったという自慢にもならぬ話が残っている。

この博奕打ちから足を洗い、芸妓娼妓の売買をあっせんする紹介業の看板を掲げたのは父の三十五、六の頃ではなかったろうか。

私などからみればどっちもどっちと思えるけれど、彼には彼の軒昂とした大義名分があったらしい。不況だとはいえ、ものが豊かな今の世の人たちに、昔の貧乏をどれだけ理解してもらえるやら大変心もとないが、私がもの心つく頃住んでいた町の裏の貧民長屋などは、それこそ目もあてられないものであった。

人身売買は人道にもとるとはいっても、国の福祉政策のない時代、一家を飢えから救う一番手っとり早い方法はこれであり、父が高々とこの職業を人助けと思い定め、親孝行の介添えと考えたのも無理からぬふしもないではない。当時は紹介業というのは警察の鑑札つきで開く職業のひとつであったが、裏に廻ればもぐりの紹介人のために泣かされている女もあったりしたから、父はそういうことへの歯止めの意義も抱いていたらしい。

その上、人助けを拡大解釈しては浮浪者や乞食のたぐいを寄せつけるものだから、私の小さい頃、家にはいつも得体の知れない男がごろごろしていたものだった。表向き善行といえるかも知れぬこの行為の、蔭の被害者はいつも女たちで、母は年中男たちの世話においまわされ、私は一人娘のはずなのに、戸籍上では何と六女になっているのだった。これはすべて父が、孤児や乞食の女の子を引き取っては自分の戸籍に入れたがための結果なのである。

父の取引先は県内から次第に拡がり、西は九州、東は名古屋まで手広く女を動かすようになったばかりでなく、昭和十年代に入ってのち、大陸向けの芸妓や酌婦を送り出すようになった。私が父の職業を心から呪うようになったのはこの頃で、家の職業のため県立女学校の入試から落とされたのがそのきっかけであった。

父・富田岩伍は豪胆、らいらく、と人には見られていたようだけれど、私からいえば短気で細心なところがあり、家に居る限りいつも机に向って何か書いていたという記憶がある。それはビジネスのための長い手紙であったり、金の計算であったり、営業日誌であったりの他に実に克明な日記を一日も欠かさずつけているのであった。

受信発信天候はもちろん、人との贈り物の受け渡しや買い物まで記帳してあるものの、ただどこにも感情の注入はなく、子供の頃の私はときどき盗みみては、「記録だけの日記なんてつまらない」と内心父を蔑んだものであった。が、この記録がいまどれだけ役立っているか、「本日松茸の初売り、百匁一円八十銭で買う」などのペンのあとを読むと、当時の物価や生活の様子がありありと判るのである。

一年一冊として父は日記をいったい何冊ほどつけたであろうか。紹介人生活四十年、とよくいっていたから、およそ三十七、八冊は貯めていたのではなかったろうか。残念なことに大半は空襲で焼かれたりして、いま私の手許には昭和十三年から二十六年まで十四年分がばろばろになって残されている。私が前記三篇の小説を書くとき、これらの日記に助けられたのはいうまでもないが、同時に、その筆蹟が身近にあるだけ父への感情もいまだに生々しいのである。

県立高女を落ちた私は女子師範付属小学校の高等科に入り、翌年もう一度別の県立高女に挑戦したが、ここでも同様だった。落ちた理由が家の職業のためとばかりはいえないが、子供の私の言動の由来すべてを、家の職業から来るもの、と教師たちはみていたふしがある。で、私は私立高女の編入試験を受け、これは通ったが、卒業するまでここでも差別されどおしだった。どんなに成績がよくても優等生にはなれず、何かの代表に内定してもいつの間にかおろされているという調子であった。

感じやすい思春期に、ありありと判るこうした仕打ちを受けた私が教師たちを憎み、それ以上に父親を怨んだ気持ちを、人には判ってもらえるだろうか。死にたいと思ったことも幾度かあり、正面切って抗議すればそのたびにこの男からは「職業に貴賤の別があろうはずがない」と己の信ずるところで以てはね返される。十七歳という若さで私が結婚したのも家から離れたさであり、この結婚が破れたのもやはり遠因は父の職業にある、といえば責任逃れになるだろうか。

父は昭和二十六年、老人結核で七十歳で亡くなった。敗戦後、人身売買の罪悪を叫ばれるようになったときの、この人の怒り、悲しみは傍で見ている私にはやり切れなかったが、長いあいだの父への憎しみ、怨みに憐れみが加わったのはこの頃からだったように思う。父の幻影から私が解放されるのはいったいつの日のことだろうか。



猛吾の日記や紹介業の名簿など

助教時代、結婚

高坂高女卒業後、同校の家政研究科に進学した。しかし、独立の思いやみがたく、恩師のつてを頼り助教の働き口を紹介してもらう。

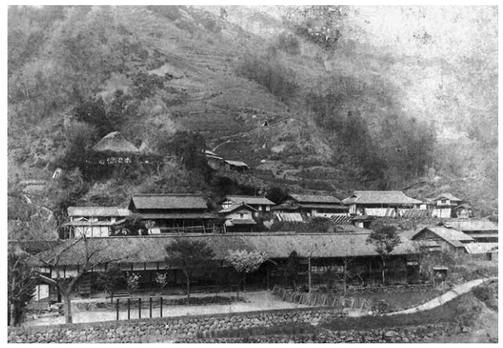
昭和18（1943）年12月、家政研究科を中途退学し、家を離れ、吾川郡池川町（現・仁淀川町）の安居国民学校に17歳で助教の職に就いた。



旧池川町の宮尾が勤めた安居小学校跡
学校のすぐ前を仁淀川の奥支流、安居川が流れる。



結婚直前のころ
昭和19（1944）年3月、安居国民学校の教員・前田薫と結婚。



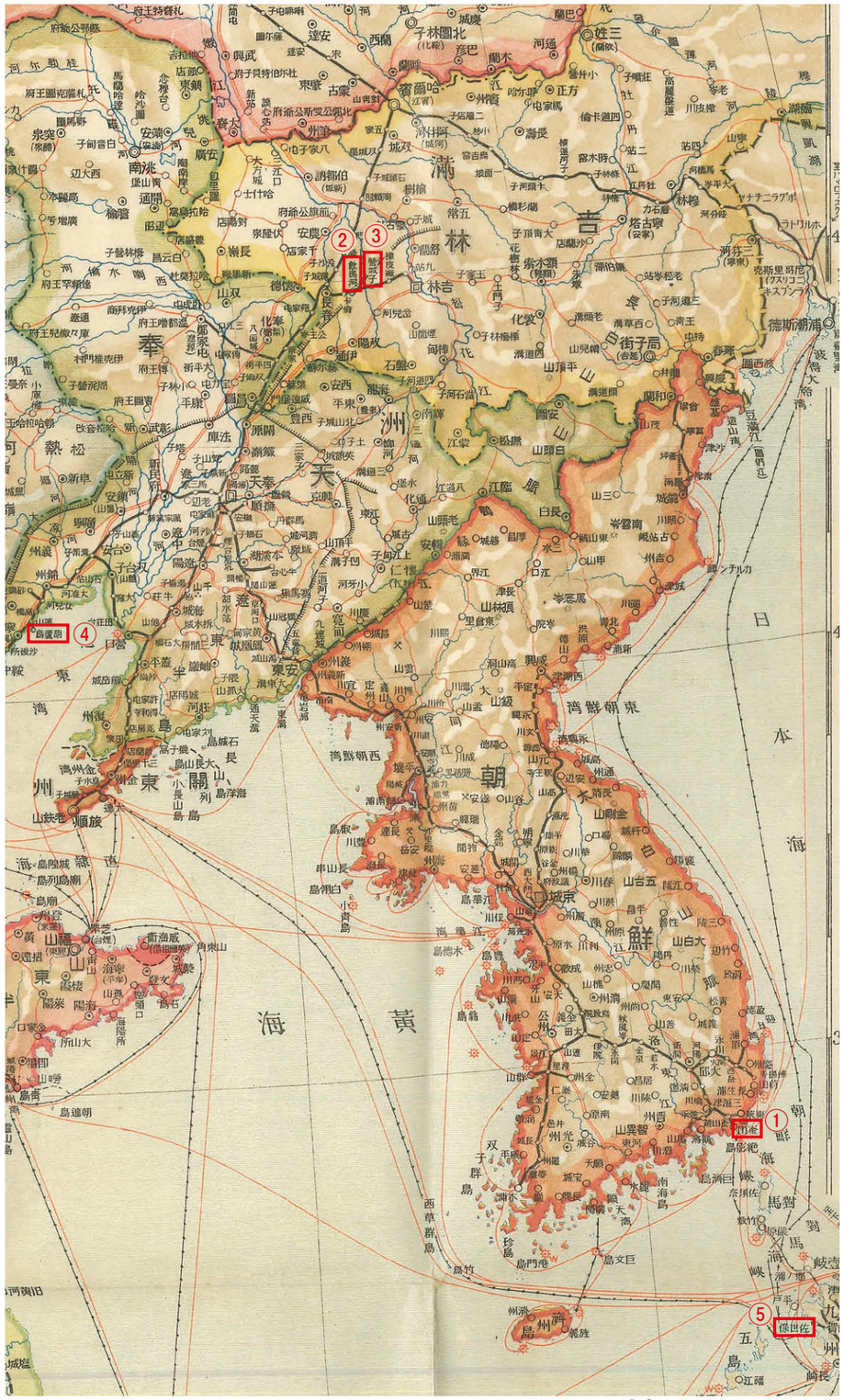
狩山国民学校 大正10（1921）年4月撮影
（『池川町92年のあゆみ』より）
宮尾は昭和18（1943）年12月から安居国民学校の助教として働き、昭和19（1944）年2月同じ池川町内の狩山国民学校に転任、同年3月には結婚、退職。

もっとも私の教員生活というのは戦争も末期の、微用のがれにやむなく奉職（これはその頃の言葉で、事大的な語感がある）していただけのことであって、その授業の内容はといえば、毎日毎日受持ちの一年生を野山に連れ出しては一緒に遊ぶばかりだった。戦争中は男が兵役に駆り出され、女先生ばかりだった状況は現代とよく似ているが、高知の県境に近い山奥のこの小学校でも男は校長一人、やっと六学級を維持していたあとの五人は、校長の奥さんと私同様の助教、または助教上がりの構成だったから、教科がどうなろうと別に誰にも叱られはしなかった。

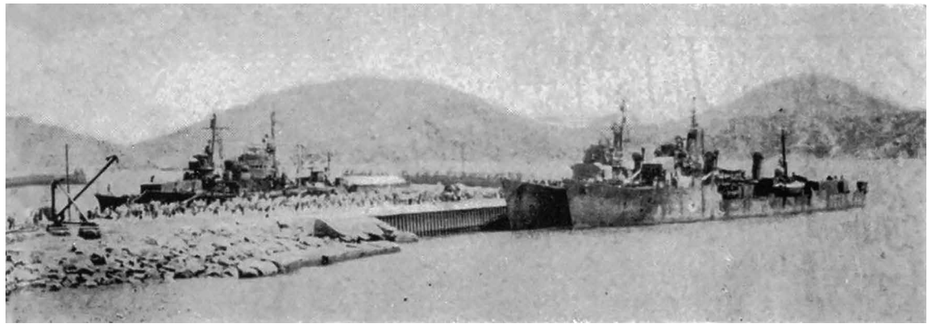
（「私のざんげばなし」『もう一つの出会い』より）

満州に渡る

昭和19（1944）年秋、夫が大土佐開拓団の教員募集に応じ、単身満州（現在の中国東北部）に渡る。翌年2月に長女を出産。すでに敗色濃厚な3月末、迎えに来た夫とともに生後50日に満たない長女を背負い高知を出発。関釜連絡船に乗船し、ジグザグ航路を経験して、4月、吉林省九台県飲馬河に到着した。



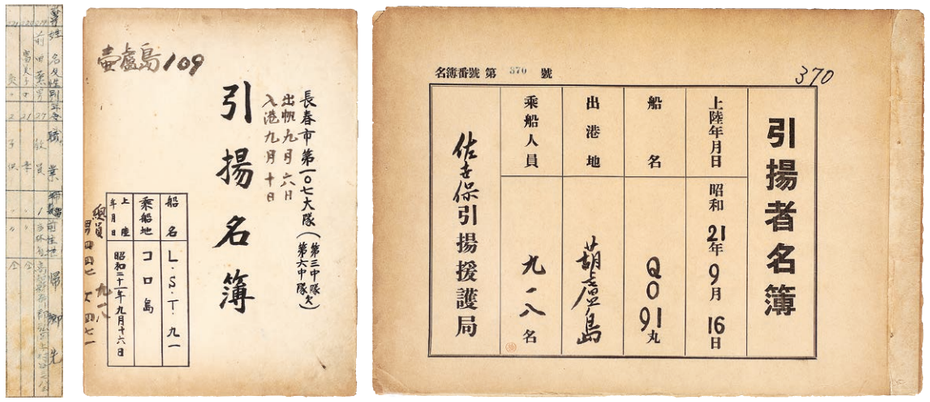
「朝鮮.滿洲及支那総図」『朝鮮滿洲支那案内』より　①釜山　②飲馬河　③営城子　④葫蘆島　⑤佐世保



引揚者葫蘆島出発の光景　（船はLST艦）昭和21（1946）年9月　『満蒙終戦史』満蒙同胞援護会編／河出書房新社刊
引揚船には日本側の商船および海軍艦艇、初期陸軍輸送艇SS、SBのほかアメリカ軍のLST（戦車揚陸艦：Landing Ship, Tank）およびリバティ型（標準型貨物船）の輸送船が使用された。宮尾が夫と娘とともに乗船したのはLST艦。

満州からの引揚げ

営城子炭礦で越冬し、5月頃九台のかまぼこ兵舎に移動。
昭和21（1946）年9月、ついに引揚げの時を迎えた。



一家が乗船したQO91丸（LST91）の引揚者名簿／国立公文書館蔵
遼東湾西岸の葫蘆島から引揚船QO91丸に乗船し、昭和21（1946）年9月6日出航、佐世保浦頭港への入港9月10日、上陸は9月16日だったことがわかる。
名簿を詳しくみてみると、乗船人員918名中、高知県へ帰郷する人員は220名。大土佐開拓団員の氏名も多く確認することができる。特に清水村分団の団員が多い。後年上梓した『朱夏』の中に「長春第一〇七大隊」と書かれた布切れを縫い付けて新京を発った場面が描かれている。



佐世保 浦頭（うらがしら）港　引揚者上陸の様子
（※参考写真「一億人の昭和史」9月号／毎日新聞社）
長崎県佐世保市の浦頭港には、満州や東南アジア方面から約140万人が帰還した。エッセイや『朱夏』などで佐世保港となっているが、実際に引揚船が入港したのはすべて浦頭港。



飲馬河に入植した大土佐開拓団の先遣隊の様子を伝える記事　昭和19（1944）年4月16日付高知新聞
大土佐開拓団や報国農場への団員出発の様子などが度々報じられた。

大土佐開拓団

戦時中、国策で満州（現在の中国東北部）に多くの移民が渡った。高知県からも約1万人が移住したと言われる。

一家がともに渡満したのは第13次大土佐開拓団で、吾川郡神谷村・清水村（現・いの町）、幡多郡大正村（現・四万十町）、津大村（現・四万十市）、安芸郡安芸町・川北村・井ノ口村（現・安芸市）、吉良川村（現・室戸市）、野根村・羽根村（現・東洋町）の10ヶ村が送出母体となった。昭和19年3月より吉林省九台県飲馬河に入植。

飲馬河邑は新京より汽車で北東に2時間のところに位置し、南北に長く瓜実型の地形であって、南北に飲馬河、東西に新京より吉林に通じる鉄道京図線が走り、鉄路と川で十文字に画しており、それぞれの地区にわかれて各村が居住した。

（『高知県満州開拓史』参照）



大正開拓団の農耕作業の風景
（『高知県満州開拓史』より）

終戦、難民生活

宮尾が飲馬河に到着したのは4月。飲馬河国民学校は4月から開校し、開拓団員の子どもたちを受け入れた。

しかし、わずか5か月後の8月、ソ連軍の参戦、そして敗戦により、満州各地で暴動が頻発。飲馬河でも各村が襲撃されるなど危険な状態におかれることとなった。





難民収容所となった営城子炭礦（写真は昭和14（1939）年6月16日付満洲新聞より）
昭和20（1945）年8月末、宮尾ら学校関係者の住居は暴徒に襲われ、汽車で下九台へ。さらにトラックに載せられ、営城子炭礦に避難した。
営城子炭礦には、同じ大土佐開拓団の清水村、神谷村などの団員もそれぞれの避難経路をとって集結していた。

「我が引揚げの記」（『デルタの記』収載）抜粋

その日、夫は学校の男の先生たちといっしょに、駅前の一号部落にある県公署の支所へ出かけていました。

昼ちかく、炊事当番だった私がバケツに米を入れ、学校わきの野天井戸でそれを洗っていて、ふと目をあげたときです。

鉄道の向うにポツンと黒点が浮んだとみるや、それはみるみるうち地平線に黒い線となって盛り上り、線はぐんぐんと幅を増しながら、怒濤のような迫力でこちらに押し寄せてくるのです。しかもその黒い怒濤は、波がしらのように手に手に武器をかざし、武器は太陽を弾いて鋭く短い光芒を引いて目を射ます。

私の絶叫と、武器を持つ集団の地響きのような怒号と、どちらがさきに家のなかに届いたでしょうか。私はもう無我夢中で喚きながら家の中にとび込み、赤ん坊を抱いて走りに走り、王家の土間に逃げ込みました。

王の大人は私と校長の奥さんとその三人の子供を見ると、黙ってかたわらのかまどの焚き口を指さしました。大家族の王の家はオンドルの口も大きく、一つの口に私と赤ん坊がすっぽりと入ってしまいます。暗い、土の臭いのするこの穴の中で灰だらけになりながら、私はどれだけの時間息を殺していたでしょうか。

長い長い時間だったようにも思うし、また一瞬だったような感じもあります。そのあいだ、穴の外の天地は怒号渦巻き、轟音破れんばかり、世の終りがきたかと思うほどのすさまじさ、よく聞くとその怒号はいちように、ファンゴライ、ファンゴライ、と叫んでいます。

ファンゴライとは、上下がひっくり返るという意味の土語で、私はそれを聞いた途端、背筋が寒くなるおもいでした。五族協和といい、満人はすべて日本人と仲よくしてくれているとばかり思っていたのに、彼等の胸の底には土地や家を取り上げられたうらみ、蔑まれていた長いあいだの辛さが、いま日本の敗戦を境にどっと噴き上げてきたのでしょう。この暴動は略奪ばかりが目的ではなく、鬱屈した怨念を思うさま晴らすための、自然発生的なものだったのではないでしょうか。いまこそ上下はひっくり返り、下だった満人は日本人たちの上に立って心ゆくばかり仇を討とうと、その怒号は喜びの凱歌のようにも聞えてくるのです。

（略）

暴動の波は一旦北へ消え去りましたが、二波三波といつ襲ってくるやらわからず、盗るものがなければ日本人の命を取ることは明らかでした。学校関係者の数はこのときたしか十三人だったと思います。全員手ぶらで駅へ急ぎ、汽車を待つ間も女子供を中心に、男の先生たちが外側に輪を作って守らねばならぬほど駅の空気も殺気立っていました。

やがてやって来た列車は鈴なりの満員でしたが、ここで取り残されて殺されるよりは、とそれこそ死にもの狂いで女子供たちは列車の便所に押しあげてもらい、男の先生たちは窓にぶら下りながらやっと次の駅の下九台に着いたのでした。

ここでも町じゅう不気味な殺気がただよっていて、集団から少しでも離れると、たちまち袋叩きに会いそうな感じ、県公署では、日本人はとなりの営城子炭坑に集結することになったから、と私たちはすぐさまトラックに乗せられ、木の一本もない赤土の小山の上にある炭坑に送られたのです。

この炭坑は、終戦まで日本人が満人の苦力を使って石炭を掘っていたもので、小山の上の炭坑事務所はいま急造の日本人事務所となり、中腹に建つもとの社宅やその他の建物は、ここに集結する日本人の収容に当てていました。ここでも満人はファンゴライを謳歌し、また実際、少し学のある満人は炭坑幹部の位置につき、日本人はかつての苦力にかわって坑内にもぐり、石炭を掘らねばならなかったのです。

私たちは難民のレッテルを貼られ、その日から床にはアンペラ一枚の、コンクリートの倉庫に入れられましたが、ここへあとから入って来る人たちはと見れば、ほとんどが大土佐開拓団、つまり教え子たちの家族なのでした。

（略）

この頃、日本人収容所にはいったいどこから指令がきていたか、食糧はどんな金で得ていたか、私にはいまでもわかりません。鉄道は止まり、ニュースは入らず、各地に暴動頻発し、治安すこぶる定まらぬなかで、むしろ食糧配給ができたほうが不思議なほどの気がします。でも、配給されるほうは、馬も食わぬという鬼コーリャンのおじやがほんの軽く軽く茶わん一杯、それも朝晩二食、という状態では空腹感は募るばかりなのです。

私たち十三人は一家族と見なされ、鍋に一つ盛って渡されるのですが、夫と私を除いてはみな山村出身者で、小さいときからいろりのそばで熱いものをふきふき食べながら育った人たちです。熱いおじやが配給されると、猫舌の私たち夫婦は皆にいつも先を越され、自分一人分の配給量さえろくに食べられぬうらみが残ります。

こういうこともあって、のちに学校関係者は袂を分ち、それぞれの道を歩んで行くようになるのですが、死と紙一重の飢餓の状態に追いつめられれば人間関係もおのずと荒廃してゆくものだということを、私はここでしたたかに体験しました。

（略）

あいかわらず食料はコーリャンのおじやが朝晩二回の配給でしたが、それでもとても幸運なことに私たちはかぜひとつひかず、まもなく春を迎えました。積雪五十センチの道に雪どけがはじまり、軒からは毎日雨のようにしずくがしたたります。春になれば人の移動もらくになり、ひょっと引揚げも始まるかもしれない、とわくわくするような期待がありました。

たぶん五月頃ではなかったかと思いますが、営城子の日本人は九台のかまぼこ兵舎に移ることになり、持てる人はここでいろいろなものを群がる満人に売って、次なる土地へむかいます。私は思い切ってふとんをこわし、その紺もめんの側で夫のシャツ自分のブラウス、子どもの洋服を作りました。このふとんは倉庫へ逃げこんだとき、日本人事務所が貸してくれたとても古いものでしたが、歩いて移動する私たちには持ってゆかれない荷物でした。

（略）

日本人たちは、ここではじめて個室に分かれ、それぞれに暮しはじめましたが、食糧不足という状況は少しもかわりませんでした。賃銀はその頃、たぶん一円か、そのくらいではなかったでしょうか。饅頭なら一個の値段です。

ただ、この倉庫の使役にはよろくがありました。

物資は何でもあり、地下足袋、防寒具、軍靴などから大豆、粟、コーリャンの食糧、また電線、テープから発電の機械まで、およそないものがないくらいです。使役は帰りにソ連兵によって身体検査をされますが、この物資をそっと靴のなかなどに隠して皆もち帰り、それを買うため、倉庫の入口には満人が群がって待っているのでした。

ここの生活は、ものこそ不自由であれ、ほとんど自由経済のかたちをとっていたように思います。日本人はそれぞれ自分でかせぎ、工夫して金を作り、その金で市場に行って好きなものを買うことができますし、治安もおちついて、日本人の一人歩きも、ひるまならばそう危くはなくなっていました。

（略）

やがて待ちに待ったひきあげの動員令が下りましたが、それを親子三人無事な体で聞いた私たちのよろこびはどれほど大きなものだったでしょうか。ただ、大集団が長い道中をするためにはさまざまの約束があり、荷物も一人二個までとか、現金は一人千円とか、つたえてきましたが、無一物の私たちには全く無縁のことでした。

（略）

こうして九台の駅を出たひきあげ列車は、全部無蓋車でした。床に糞のあとがあり、とても臭かったとおぼえていますから、おそらく家畜やなんか運ぶためのものだったとおもわれますが、それを見て文句をいう人は一人もいませんでした。列車のなかは立錐の余地もないほどの詰めこみよう、身動きすることもできず、一車輌に一つずつ、むしろでかこって作ってある便所へ行くのには、人のひざの上をふんで通らねばなりません。

（略）

九台を出て内地に上陸するまで、この旅はおよそ二か月もかかったとおぼえています。先を急ぐ私たちにとって、この期間は不安と焦燥の日々でした。もしや病気にかかり、途中で死んでしまえば知らぬ土地に埋められ、おそらく永久に、誰にも墓まいりはしてもらえぬことになってしまいます。事実そのとおり、伝染病でなくとも、栄養失調のあまり、途中でぽろりぽろりとこぼれるように人が死んでゆきました。

とくに子供は長旅にはもちこたえられなかったものか、ほとんど助からず、のちにひきあげ船に乗ったとき、ひろい船底に詰めこまれたひきあげ者のなかで、背中におんぶするような小さな子供は、私の家の長女がたったひとりというありさまでした。

やっと新京を出て乗船胡盧島へ着いたとおもえばまたここでもとめおかれ、そして頭からDDTを真白にふりかけられてからようやっと船に乗ることができたのです。船にはあふれんばかりのひきあげ者が乗っていましたが、どこまでいっても私たちが最低の難民であることに変りはありませんでした。

（略）

ただでさえ船足がのろい上に、いく度も水葬礼をしながら進むものですから、ずいぶんと日にちがかかりましたが、朝めざめて、九州の山の緑をはじめて見たときの喜びは、とうてい口にできるものではありません。生きて内地の山が見れるという保証は、この日、このときまで何もなかったのですから。

昭和二十年三月末に内地を発ってから、二十一年九月上旬佐世保港に着くまで、こよみの上では一年七ヵ月にすぎませんが、この年月は、私にはいく十年の長さにおもえました。

体も人一倍弱く、最低の難民生活を一年余り送った私が、家族一同一人も欠けず、一緒にぶじ内地にたどりついたのは、いま考えてもほんとうにふしぎなこととしかいいようがありません。飲馬河で暴動に会ったとき、九台へ逃れる途中の汽車の中、営城子の倉庫の生活、社宅やかまぼこ兵舎に移ってのちの病気の危険など、いま思えばいつも死と紙一重の月日でした。

それだけに、検疫が終って佐世保港の桟橋に第一歩をおろしたとき、私はこらえきれず、声をあげて泣きました。涙はあとからあとからあふれてとまらず、私は汚れたブラウスの袖口をひっぱっては涙をふきました。

（略）

私はいまでもときどき、広い満州の曠野におちてゆく真赤な夕陽のゆめをみます。それは美しい光景というよりも、またなつかしい光景というよりも、この地で戦争の犠牲者となった人たちの血のいろ、とおもえてならず、いつもゆめさめてのち、心のうちで手を合わせるのです。

仁淀川のほとりで

昭和21（1946）年9月、親子三人で仁淀川のほとりの夫の郷里、弘岡上ノ村（現・高知市春野町）に帰還。昭和20（1945）年3月に出発して以来、1年半ぶりのふるさとの地だった。

夫の生家で暮らし始めると、宮尾は夫の母と祖父とともに、慣れない農作業に従事するが、翌年には肺結核と診断されてしまう。

死を覚悟した宮尾は、娘のために満州体験を書き残してやりたく思い、ノートを書きはじめた。



水量豊かな仁淀川（八天大橋から下流を撮影）
昭和21（1946）年9月21日、伊野で引揚列車を降りると一家は仁淀川沿いをくだり、徒歩で下流左岸の弘岡上ノ村（現・高知市春野町）をめざした。
水に苦労した満州での難民生活を過ごした宮尾にとって、仁淀川の清く豊かな水は夢にまで見たものだった。後年執筆したエッセイ「仁淀川と暮らした二十年」の中には、豊かな水に恵まれた弘岡上ノ村での暮らしぶりが細やかに記されている。

> 私が小説を書こうと思い始めたのは昭和二十一年、満州から引き揚げて帰ってきた時だった。飢えに苦しんだ収容所生活一年余を経ての引き揚げだったから栄養失調の上に、引き揚げ後馴れぬ農業労働に従事したせいもあってたちまち結核にかかり、当時まだパスもマイシンもなかったところから、結核宣言は死の宣告と同じだったのである。
>
> 私はその時死を待つばかりの毎日をすごしながら、どうせ死ぬのなら満州生活のあの異常な体験を書き残しておきたい、と切に思ったのが小説らしきものを書きはじめた最初だといえよう。当時私はまだ二十歳だったが、結婚が早かったためすでに二歳の子供がありかつ農家の嫁という立場もあって病気ではあっても家事労働から逃げる事は出来なかった。家事というのは農事労働に較べると労働のうちに入らず、昼間は寝ていても、夕方皆が野良から帰るまでには食事の支度ぐらいしておくのがあたりまえのことだった。いま思えば、田舎のことで水道もなく、重いつるべを汲みあげて、鉄の重い釜でのごはん炊きや風呂わかし、薪わりや漬物石のあげさげなど、息を切らしながら自分でもよくやったと思う。しかしこの暮しより他に果して当時私の逃げみちがあったかといえば、混乱の世相のなかで何の目あてもなく、腹を据えるより他なかったのである。
>
> が、私はよほど悪運強いたちなのか、薬も飲まず安静にもせず、栄養など全く摂らず、そのうち結核はいつの間にやら自然に治癒してしまった。いまも私のレントゲン写真を見、そして心電図を見た医師は、「この弱い心臓で結核をなおしたなんて奇蹟としか考えられぬ」と皆さんおっしゃるけれど、もし治癒の原因を考えるなら、二十代の若さと、毎日を病人としてすごさなかったことぐらいではなかったろうか。で、結核はなおってしまったが、このとき以来小説を書く習慣だけはありありと私の生活の中に根づいてしまい、こののちずっと今日まで、えんえん三十いく年、家事とおなじように毎日必ず書き続けるのである。
>
> （「家事と小説」『女のあしおと』より）

昭和22（1947）年6月18日より書き始めたノートは冊数を重ねていった。

昭和23（1948）年10月「文藝首都」に初めての作品「村芝居」を投稿する。「推薦作その他」の欄には、選外ではあるものの、「前田登美」の名と作品名が掲載された。

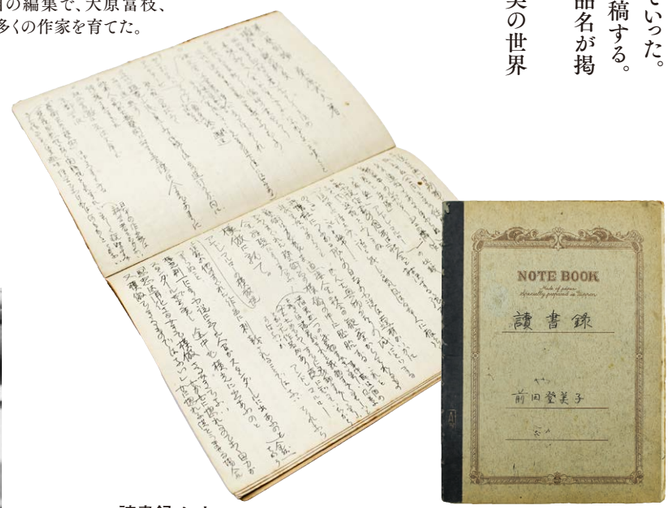
昭和24（1949）年1月、次女誕生。この頃、谷崎潤一郎『細雪』の美の世界に感銘を受ける。同年12月、最愛の母・喜世が亡くなる。



昭和22（1947）年の習作ノート
すでに小説の形態をとっている。



「文藝首都」第16巻10号
昭和23（1948）年10月／新太陽社刊
日本近代文学館蔵
「文藝首都」は投稿型の同人誌。
保高徳蔵独自の編集で、大原富枝、佐藤愛子など多くの作家を育てた。



読書録ノート
20代から30代に読んだ書籍についての記録が感想とともに書かれている。

●読書録に記された書名一覧

• 愛の生涯	ド・バルザック	三好達治訳1952.1.4読了
• 世界文化史概観 上	ウエルズ著	長谷部文雄訳
• 谷間の白百合 上	ド・バルザック	新城和一訳
• 巴里の女	サマセット・モーム著	中村能三訳
• 情念に就て	アラン	小西茂也訳
• 第二芸術論	桑原武夫著	
• 異邦人	アルベール・カミュ著	窪田啓作訳
• 武蔵野夫人	大岡昇平著	
• 赤と黒	スタンダール	
• 雨月物語	上田秋成	
• 立原道造詩集		
• 三好達治詩集		

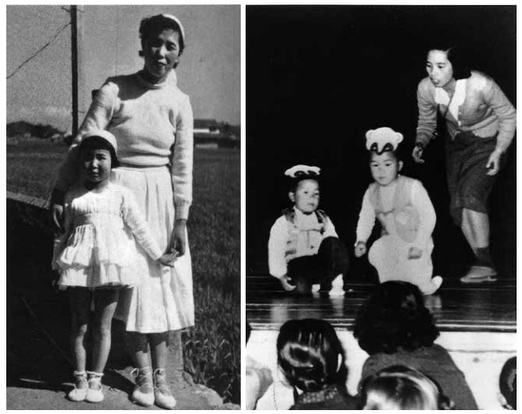


昭和20年代後半　20代
保母時代に弘岡上ノ村の家の庭先で。

保母として

昭和26（1951）年5月、父・猛吾が死去。同月より、村立保育所に保母として勤めはじめる。父兄から「あの先生は家でも保育所をやっている」といわれたほど保育の仕事に打ち込み、さらには県下の保育大会で「保母の社会的地位の向上」という研究発表を行うなど村内にとどまらない仕事ぶりだったという。

昭和33（1958）年4月からは高知県社会福祉協議会の保母会事務局に転じ、『保母の生活白書』刊行、保母会単独での保育大会開催など、精力的に活動した。



保母時代



昭和28（1953）年　後列中央が宮尾



「草の実」／高知県社会福祉協議会刊
保母仲間と発行していた機関誌。
高知市立市民図書館蔵



同人誌「草の実」を出していた頃
昭和30年代初め。左端が宮尾。



『すべり台の子どもたち』
昭和31（1956）年8月
高知市立市民図書館刊



『すべり台の子どもたち』出版記念会
前列右が宮尾。
はしがき、あとがき、本文のリライトを担当した。

女流新人賞

昭和37（1962）年は宮尾にとって飛躍の年となった。

2月、NHK高知放送局主宰のラジオドラマ脚本募集で「土佐真珠」が佳作三席になり、5月には「真珠の家」が第5回「群像」新人文学賞の予選を通過、897篇中56篇に残るなど、着実に作家へと歩みを進め、3月には社会福祉協議会を退職し、文筆活動に専念することに。

9月にはテレビドラマデビュー作「女流」が、NHK「女の園」第46話として全国放送され、大きな話題となった。

そして10月には「連」で「婦人公論」の第5回女流新人賞を受賞。受賞は県内各紙で取り上げられ、「前田文学座談会」が高知新聞紙上で開かれるなど、一躍時の人となった。



「婦人公論」昭和37（1962）年11月号
第5回女流新人賞発表号。
選考委員の丹羽文雄の選評によると、「全体的に非常に水準が高く」、「芥川賞にもひけをとらない」作品が並ぶ中、前田とみ子「連」が受賞。
「連」とは真珠をつないだ首飾りのこと。真珠の珠をつなぐ〝連通し〟の職人・裙子とそれを取引する女性経営者の「女の世界」を描いた。



昭和37年8月25日付 高知新聞記事



須崎市浦ノ内湾の真珠養殖場の風景／須崎市提供

昭和36（1961）年夏、須崎市浦ノ内湾の真珠養殖場を取材。真珠に魅せられ、「真珠の家」「土佐真珠」など真珠を題材にした作品を何度も書き改め、「連」へと結実した。

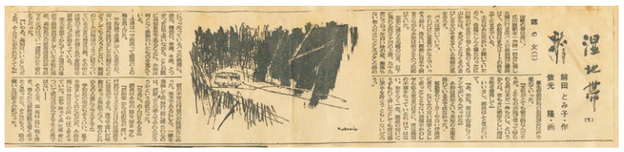


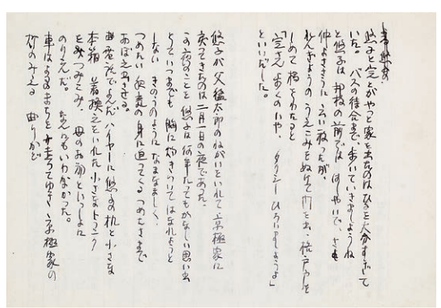
「湿地帯」連載予告の挿絵　依光隆画
挿絵は土佐山田町出身で中央で活躍していた画家の依光隆が手掛けた。

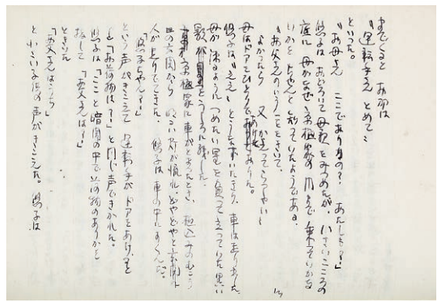


習作原稿「真珠」　400字詰原稿用紙61枚ペン書

高知新聞に連載された新聞小説「湿地帯」
昭和39（1964）年5月22日～10月26日まで 全156回連載。
愛媛県の日刊紙「新愛媛」でも同日から連載が開始された。







創作ノート
年代未詳だが、保母時代と思われる。
後年の『櫂』終章で描かれた母子別れのモチーフがすでにみられる。

受賞のことば

この素材を扱いはじめてからここ半年のあいだに、約百枚のものをわたしは十ぺんの余も書きなおした。真珠という素材に、人間のわたしが完全にとりこにされていたといえる。

だから、それがいつのまにかこの素材で賞を得たいという大それた望みをもつようになったのも、いわば我執のもつ勝手なつよさなのであろうか。

それだけに、受賞のしらせをうけたときのうれしさは格別だった。ことに「女対女」の心理的な複雑さはわたしの文学上の課題であり、受賞によって一つのステップが得られたことは強みである。

今後も、これを攻めつづけていきたい。



「婦人公論」
昭和37（1962）年11月号

下積みの頃

昭和38(1963)年1月、「連」が第48回直木賞候補にノミネートされたものの、落選。女流新人賞受賞1年後の9月に行われた土佐文雄との対談で、「受賞してこの一年間に、文学で生きることのきびしさを思い知った」と吐露しているように、高知にいながらの文筆活動は思うようにはいかなかった。

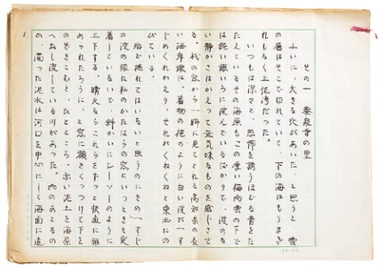
昭和41(1966)年1月、金銭上の理由から高知の家を引き払い、再婚した夫とともに上京。東京都杉並区下高井戸の家賃六千八百円の六畳一間のアパートに移る。「女性自身」他、週刊誌や婦人誌のリライトやライターの仕事を得るが、次第に仕事がなくなり、10月からは赤ちゃんとママ社に就職。月刊誌の編集にたずさわりながら、小説を書き続けた。





昭和40(1965)年、秦泉寺の自宅で

前夫とは昭和38(1963)年3月に離婚。昭和39(1964)年11月、高知新聞学芸部記者・宮尾雅夫氏と再婚。生涯の伴侶となった。



高知時代の習作原稿「その一 秦泉寺の里」
400字詰原稿用紙56枚ペン書／前田とみ子用箋
高知市秦泉寺に住む女性作家の死を前に、従妹が作家を訪れるという内容。



編集者時代



月刊誌「赤ちゃんとママ」
赤ちゃんとママ社刊
対談の司会として誌面に登場することもあった。



第一生命住宅のPR誌「さんるうむ」
編集者時代のスケジュール帳(1969年・1971年)
昭和43(1968)年12月から昭和47(1972)年12月までの4年間勤務。著名人の取材など日々の仕事の内容が細かく記されている。

しかし、本格的な勉強の手間を省き、小器用に思い付き一つで小説作りする態度にはすぐ限界が来てしまい、上京後、作品を持って訪れた出版社からは悉く慇懃な断わられようであった。

この時期は、全能力をあげて書いたと思い、人に指摘される欠点は自分の目には見えてこなかった。人をも自分をも始終疑い、しかし書くことは休まなかったから、これでもかこれでもかと絶望の笞で日々打ち据えられているようなものであった。この苦しさに耐えかね、またいつまでも遊べていられない家計の事情もあり、新聞広告を見て編集者の道を選んだことが結果的にはこの蟻地獄からの脱出手段となった。

会社勤めは一種の逆療法にも似て、全く異質の刺激ながら、私にさまざまのプラスをもたらしたようであった。

通勤往復の電車の中で、吊革につかまりながら再び読み返す、好きな方葉や伊勢や平家や或は漢籍のたぐいは驚くばかりの新鮮さで心に食い込み、自分の躰の隅々まで吸収されていくように思えた。長い年月磨き抜かれてきた先哲の作品は、改めて知識を与えてくれたばかりでなく、もの書きとしての覚悟を根本から私に問い直してくれるようであった。

(「女流新人賞から太宰治賞へ」『母のたもと』より)

赤ちゃんとママ社には約1年半勤務するも、人間関係の行き詰まりから昭和43(1968)年3月に退社。

次の勤務先として第一生命住宅で編集者として働きはじめるまでの約8か月間、腰を据えて作品執筆に取り組み、後に宮尾文学の代表作となる作品が萌芽する。

「櫂」と「二絃の琴」の土台の誕生である。

昭和43年の日記から

※執筆に関する箇所のみ抜粋

3月31日(日曜日)
八時半目覚める。明日から出勤する必要がないと思うとせいせいする。
支度して、彼とふたりでバスで伊勢丹へ。そこでさまざま買物する。
つぎ、紀伊國屋に寄って、原稿紙たくさん買い込む。二万円使い切ってしまった。
十一時半就寝。赤ちゃんとママ社には、計一年と五カ月の勤務だった。

4月10日(水曜日)
以前から書きたいと思っていた、寺田寅彦のことを調べたくなり、まず「赤ママ」の小山社長にTELし、一時すぎもとの会社へ出掛けていく。

4月11日(木曜日)
昨日社長に借りてきた、『寺田寅彦』を一日読む。
今日は冷たい雨で、一日ストーブを入れている。
一絃琴の研究者、吉本青司に手紙出す。

4月17日(水曜日)
朝からずっと考え続ける。やっぱりおカネ欲しさに、気にもそまない小さな投稿の仕事をするより、書きたいものをぐあーっと書くほうがいいと思う。
資料探し。わずかな本の中から、晩までそれに没頭。何もかも忘れて。

4月20日(土曜日)
今日から長篇書きはじめる。たいへん滑り出しよく、気に入って興奮しのぼせる。一日中書いていたいが、雑用あって、途中でたびたびやめなければならぬ。今日は寝ようとしても、興奮しきっていて眠られぬ。ナンバー一から七まで、七枚書いた。

4月23日(火曜日)
一日中ずっと書く。ナンバー十四から二十二まで九枚。ずっと机に向かっている。書くことが、こんなに楽しいとは思わなかった。夜も、ずっと机に向かうが、あんまり根を詰めるとだめになる。

5月7日(火曜日)
ナンバー七十八から八十七まで十枚。
朝から荒い雨。懸命に書く。風呂へ行く時間も惜しくて、五時半まで。
見てくれる人もいないのに。あてもなく、懸命に書く。ただひたすら書く。

5月23日(木曜日)
ナンバー百六十六から百七十二まで七枚。
今日くらい苦しい日はなかった。天気がどんよりして、なんとも気分が悪く、一行書いては寝ころび、一行書いては寝ころび、第一章百六十八枚を荷造りしてしまい、第二章へかかる。

6月20日(木曜日)
ナンバー三百四十五から三百六十まで十六枚。
今日は仕事はかどる。夜お灸をすえてもらう。
今日、カネもないし、近く就職しようかと考えたが、なにしろこの小説を仕上げるまでは動いてはいかんと思い、就職あきらめる。

7月1日(月曜日)(№三八七~三九一、五枚)
小説に急に取りつきにくくて、机に向かっても、足の皮をはいだり、ノートに落書きばかりして過ごす。書いたものを読み返してみると、絶望する箇所もあるが、何カ月かかっても、また書き直そうと決心して、書くことに決める。

7月9日(火曜日)(№四六四~四七四まで、十一枚)
夕方風呂へ行き、風呂の中で考えたが、あぜらずもう一度書き直してもよいと思う。ドスト(註 ドストエフスキーのことだと思う)の十三年からくらべれば、私など短いものだし、開高氏だって三年間よそ見せず書き下ろしを書いたという。私ならさしずめ五、六年、他のことを一切やめて書いていいのだし、これからはなるべく貧乏にも甘んじて、作品本位でものを考えよう。原稿を金に替えるなんて了見は絶対に起こさないことだ。

7月11日(木曜日)(№四九〇~四九七まで、八枚。完結)
仕事、とうとう終わる。終わりになると、どうも駆け足になっていけない。だが、もう一度書き直すつもり。私は未熟だから。(註 これは『櫂』のことと思われる)

7月20日(土曜日)(№一~八、八枚)
机に向かい、やはり全篇書き直すこととする。これから毎日、四十枚のノルマだが、やれるかどうか。夕方、渋谷まで買物に行き、とんかつ食べてもどる。

7月30日(火曜日)
仕事もいやにならず、四時まで一生懸命。一章、二章ともに一応終わって、箱の中にしまう。これから三章の難関。しばらく祈る。

8月22日(木曜日)
夕方までずっと次の書き物について考える。せっかく吉本青司さんが送ってくれたのだから、二絃琴を書いておこうかとも思う。

8月23日(金曜日)
今日は一日中窓を閉め、ソックスをはいて仕事する。涼しい。
仕事はやはり、一絃琴の島田勝子を書くこととし、一日中ずっと年表を作ったり、抜き書きをしたり、面白くて食事をするのも忘れる。
夜も、九時半まで土佐関係のものを読み続ける。彼は十時半もとって、足が腫れているという。電話帳を探して、島田寿子探し、連絡して、明日取材に伺う。

8月31日(土曜日)(№一から三まで、三枚)
また、雨。今週は一週間降り続いた。今日こそはものにしてみせると張り切って机に向かい、とうとうねばり続けて三枚書く。夜もずっと書き続けていたら、彼は七時半ごろもどってくる。
今日で八月も終わり也。病気は一度、作品の上の収穫は、長篇をやっと完成、次の「絃の琴」にかかれたこと。

9月9日(月曜日)
『櫂』、第一章読む。自分としては、あれ以上直しようもないと思う。二章読んでいたが、なんだか頭がさえないのでやめて、あとずっと編み物をする。
肩は凝るが、頭を空白にするにはよい作業。つまらぬ空想をするよりそのほうがいいかもしれん。

9月12日(木曜日)
一日中、『櫂』を読み返す。夜十時までかかった。肩が凝るし、頭もぼけるが、ともかくも読めると思う。明日は中公へ持って行きたいと思う。

9月30日(月曜日)
見るべき仕事は、
一、中公へ『櫂』五百三十枚渡す。
二、有紀書房の仕事をしてみたが、結局だめ。
三、『二絃の琴』説話体で書き始める。

11月1日(金曜日)(№一七三~一八七、十五枚)
日差しの強い秋晴れ。
昼寝、執筆、読書、いつものとおり。身体はたいへん調子よし。
今の『絃の琴』、下書き終えたら働きに出ることにする。

11月9日(土曜日)(№二八七~二九八、十二枚。終わり)
仕事、午後三時ごろ『絃の琴』を終わる。包んでしまっておく。いつの日か、これが下敷きになる日もあらんか。

11月12日(火曜日)
九時半、第一生命住宅へ。そこで調査書へ書き込み、十時面接、十時半終わって東京へ。
十一時半、婦人公論、「ブルニエ」で倉沢さんにお昼ご馳走になりながらいろいろ話す。やっぱり原稿もどされる。(略)が、もどって読み返してみると、これはやっぱりまだまだだ、やはりいいものを出さなくてはと思い、何年かかっても満足できるものに書き直す覚悟を決める。

第二章

大河小説の世界

～自伝的四部作と周辺作品

転機となった『櫂』は、「連」で女流新人賞を受賞後、十年間の苦難の下積生活を経て、「人の心を打つ作品を生むのには、自分自身血を流し、痛みに耐えながらその姿を人前にさらす勇気がなくてはならぬ」という決心にたどり着いたあとに書かれたものです。

長い作家生活においてこの決心はゆらぐことなく、自分自身に目を向け続けて『櫂』『春燈』『朱夏』『仁淀川』という自伝的作品を三十年の歳月の中で書き紡いでいきました。

作家の加賀乙彦は、父母を描いた『櫂』、少女時代を描いた『春燈』、満州からの引揚体験を綴った『朱夏』、夫の生家の農村での生活を描いた『仁淀川』の四作品に『岩伍覚え書』『寒椿』を加えた6作品は大河小説になるだろう、と高く評価しました。

明治終わり頃の父母の出会いから、一家の明け暮れ、芸妓紹介業の父・岩伍の商いと母・喜和の苦悩、作者本人を投影した主人公「綾子」の成長、綾子とともに過ごした「仕込みっ子」たちそれぞれの行く末、戦争へと突入していく時代情景、敗戦、満州からの苦難の引揚げ、そして戦後の暮らし…。

明治から昭和という激動の時代の高知を舞台に、土地の風俗や時代背景を丹念に書きこみつつ、一家の幾春秋を描いたこの作品群は、宮尾が暮らした弘岡上ノ村を流れる大河・仁淀川のように豊かな流れを持つ、大河小説としてこれからも読み継がれていくでしょう。

私家版『櫂』の誕生

第一生命住宅で広報誌「さんるうむ」編集の仕事のかたわら、こつこつと「櫂」を書き続けた。昭和47(1972)年1月1日の日記には、年頭の計画として、47年の後半には『櫂』を自費出版する計画をたて、この一年をかけて『櫂』原稿の書き直しをする決意が書かれている。

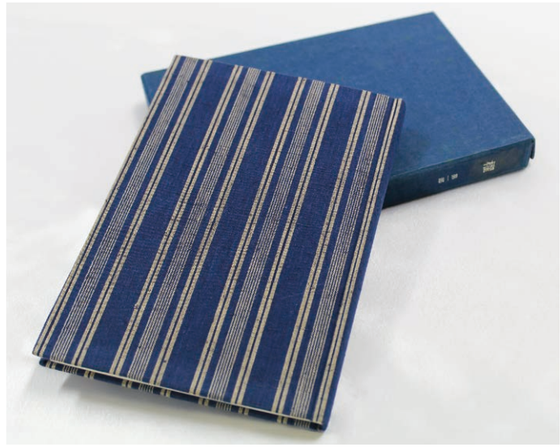
編集者として訪ねていた作家・野田宇太郎の書斎で私家版をみせてもらい、文字が活字となることの重みを感じ、宮尾自身も私家版を作ることとしたのだ。

9月、出来上がった私家版『櫂』を、知人や出版社に送る。10月2日、筑摩書房から、私家版『櫂』を高く評価し、第四部まで書き上げるよう要請される。

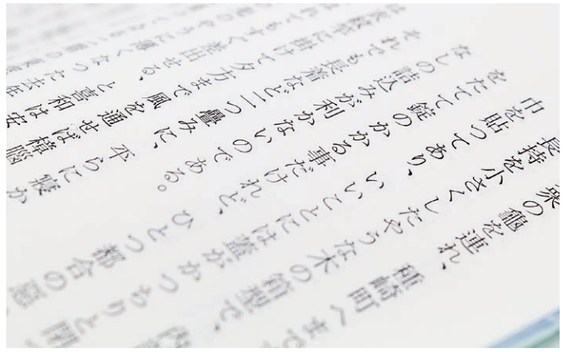
翌年、筑摩書房主催の太宰治賞候補に推され、第9回太宰治賞受賞となり、作家・宮尾登美子の人生が大きく開けていくこととなった。

誰からも制約を受けることのない自由な内容と念入りな装幀、しっかりした紙に正確に植えつけられた活字を見ているうち、ふと、長い間私が文章を粗製濫造して顧みなかったのは、自分の本を持たないせいなのではないかと思った。原稿紙の文字が書籍の中の活字に移されてゆくとき、重みのない、必然性のない言葉は当然淘汰されるべきなのを、その経験を持たない故に、いい加減なところで言葉と妥協していたものと見える。

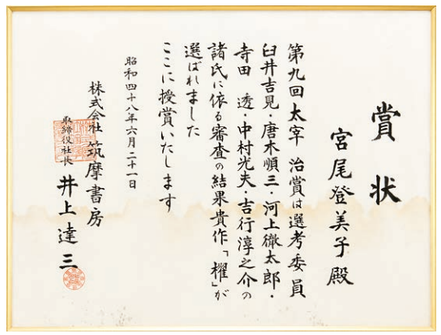
（「女流新人賞から太宰賞へ」『母のたもと』より）



私家版『櫂』　昭和47(1972)年8月刊
自費出版で500部刊行。
『櫂』は母・喜世への鎮魂歌であり、表紙の布地には、母が着ていたガス縞を再現したく、銀座の呉服店「えり円」で手織りの風合いを持つ田舎縞を調製してもらった。この私家版制作に第一生命住宅での1年分の給与をつぎこんだ。



私家版『櫂』の本文
「龜」や「疊」など、画数の多い旧字を敢て使っている。
これは難しい字や時間のかかる字を書くことで文章の走るのを戒め、集中力を培うためだった。


賞状
宮尾登美子殿
第九回太宰治賞は選考委員
臼井吉見・唐木順三・河上徹太郎・
寺田　透・中村光夫・吉行淳之介の
諸氏に依る審査の結果貴作「櫂」が
選ばれましたので
ここに授賞いたします
昭和四十八年六月二十一日
株式会社　筑摩書房
取締役社長　井上達三



第9回太宰治賞賞状と記念品のオメガの時計
「一行一句、作者の感受性できびしくえらびとられてい」る、「作者のまともな古風さが、かへつて新しい何かを現代文学にもたらすことを期待」、「第一章で、すでに当選の予感をもった」などと激賞され、満場一致で受賞が決定した。



昭和48(1973)年6月21日、太宰治賞贈呈式で。

『櫂』上・下巻





上巻　昭和48(1973)年12月　筑摩書房刊
下巻　昭和49(1974)年３月　筑摩書房刊

私家版として出した『櫂』(第一部)に第二部から第四部までを仕上げて刊行。自身の父母をモデルに、生家のことを余すことなく描いた渾身の大作。

大正から昭和初期の高知の花街が舞台。渡世人の富田岩伍に、十五歳の喜和は嫁いだ。

やがて岩伍は芸妓娼妓紹介業の看板を掲げ、喜和との間には徐々に溝が生まれてゆく。

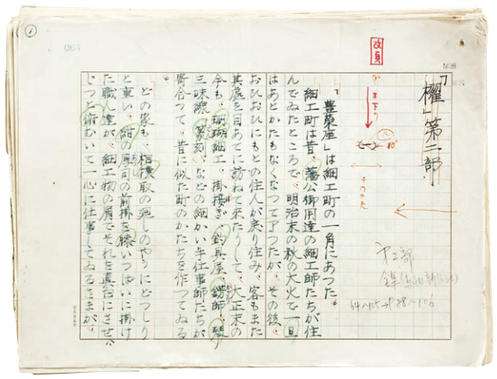
岩伍が義太夫に産ませた赤ん坊の綾子を喜和は溺愛して育てるが、二人の不仲はいよいよ深まり、ついに喜和は家をでることになった。

練り上げられた文体で、喜和と岩伍の物語と交差しながら、大正から昭和にかけての高知の下町の風景や風俗が、地図が浮かびあがるように鮮やかに描かれている。

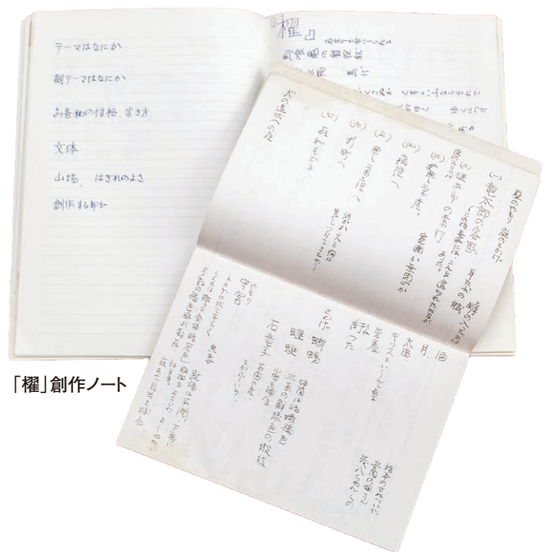
考えたのは、私が二十何年書きつづけて来たものは、単なる自己満足の域を出ないものであって、人の心を打つ作品を生むのには、自分自身血を流し、痛みに耐えながらその姿を人前にさらす勇気がなくてはならぬ、ということであった。私は決心し、自分が小さいときから奥深く抱いていた劣等感を、裏返して書いてみようと思った。家の職業を公にすることによって私は今までよりさらに人にさげすまれるかも知れないが、一生劣等感に溺れ、自分も傷つかずに嘘っぱちを書き綴ったとて何の前進もないことはよくわかっている。

こう心を決めて居直ると意外に気分はらくになり、家の職業や自分の出生についてあますところなく書いたのが『櫂』だった。私はいまでもこの作品を読むと、これを書くときの悲壮な決意が伝わって来てひとりでに涙が溢れて来る。

(「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」『母のたもと』より)



「櫂」第二部　原稿
昭和47(1972)年10月、私家版『櫂』第一部を受け取った筑摩書房は作品を高く評価し、翌年いっぱいで四部まで仕上げるよう宮尾に要請。この依頼は太宰治賞を受賞する以前のことであった。



「櫂」創作ノート

『春燈』



昭和63(1988)年1月　新潮社刊
「新潮」に1985年8月号から1987年11月号まで連載。

自伝四部作中もっとも書きにくかったという作品。

『櫂』につながる作品で、母・喜和と別れ、父・岩伍のもとで暮らす綾子の、女学校入試の失敗、父への激しい反抗、家業への劣等感、継母の連れ子との反目という多感な思春期の姿を描く。

さらに、自我に目覚め、自らの意志で助教として山村で働き、やがて結婚へと歩みだす。

太平洋戦争に突入していく不穏な時代を背景に、綾子十三歳から十七歳までの青春が赤裸々に描かれている。

自作についていまさら補遺をこころみるうしろめたさと、それに殊更「春燈」については気が重いということがあります。

何故なら、「春燈」は正しく「櫂」の続篇に当りますが、内容は、次第に自我に目覚めてゆく綾子自身の独白、或はざんげ、或はその狭い視野のなかでしか語られていないし、それが果して読者の方にどんなふうに伝わるのか、全く予測もつきませんでした。

しかし、読者の顔いろを窺い窺い、ものを書く態度は、私の好むところではありません し、それは「櫂」を書く決心をした時点から自らの信条として来たはずでした。ですから いまさら、綾子の少女期を語る苦しさは決して口にいたしますまい。綾子像がいかように曲解されようとも、それはもはや作者のあずかり知らぬ領域だと心得ております。

「春燈」の完成で、綾子の人生は「櫂」と「朱夏」がつながりました。「朱夏」の終章で綾子はようやく二十歳、このあと展開してゆく運命について、果して作者が勇を振るって立向えるかどうか、いまはまだ何もいえません。

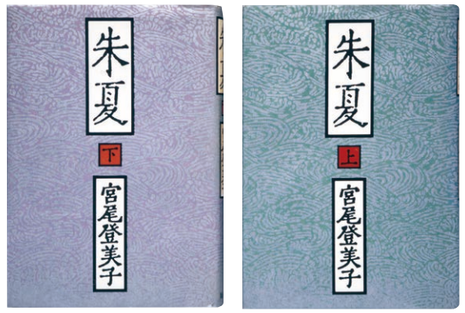
考えてみれば、綾子という一個人について何故かくも執拗に追い続けるのか、疑問も起りますが、作家として、或は対比として、ならばその代償として他人の人生を描くならばその代償として、或は対比として、自分自身をあますところなく暴いてみせるのが誠意なのだと、ほとんど頑固にそう思い込んでいます。

(『春燈』あとがきより)



『春燈』出版記念サイン会の様子
平成10(1998)年1月23日　於:横浜高島屋　©新潮社
集まった大勢の観客の高揚した表情に、当時の宮尾の人気ぶりが窺える。

『朱夏』上・下巻



上・下巻　昭和60年（1985）6月　集英社刊
「すばる」に1980年5月から1985年4月号まで連載。
自伝的四部作では『櫂』の次に発表された。

昭和二十年三月、十八歳の綾子は教師の夫と生後まもない娘とともに満州・飲馬河邑に渡る。

広大な大陸での生活はわずか5ヵ月で終わり、日本は敗戦。

九月、暴民に襲われ、持てるものすべてを失った綾子たちの、1年に渡る難民生活は飢えと死の恐怖との戦いだった。

難民という集団の中でむきだされる、極限状態に置かれた人間のエゴイズムを赤裸々に描きだしている。

『朱夏』は、五十五年五月号から連載をはじめ、六十年四月号まで五年間の長丁場だったが、これについては自分の気持の上でもずいぶん分紆余曲折があった。

ことの起りは、ときの編集長Mさん、担当者Yさんの執拗な勧奨によるものだが、何しろテーマは私の中国体験だし、これ書くために作家を志望したという私生涯の命題なので、そう軽々しく書けはしないのである。

自分のひそかな予定では、死ぬ直前、最後の作品として書こうかな、とも考えていただけに、最初は頑強に拒んでいたが、何しろ当方女の細腕、屈強な男二人に迫られれば、泣き泣き書きはじめるより他、なかったのだった。

書きながら、まだ時期尚早ではないかという反省しきりで、それに、中国体験は私の恥部も恥部、できれば忘れてしまいたいほどの地獄絵図だったから、執筆はとても苦しいものだった。

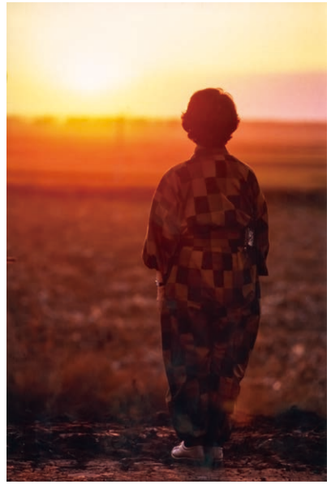
毎号毎号、まるで反吐を吐くようにして書いた原稿を渡すつらさ、このつらさから逃れたい逃れたいと思いつめた挙句、ある日の午後、受話器を取って休載をお願いしたところ、M編集長は意外とあっさりOKして下さった。

（中略）

『朱夏』は、私の心の葛藤のなかで苦しみながらようやく完成させたのだが、いまとなってはあのとき、M編集長とYさんに迫られて書いてよかった、とつくづく思う。

放置すればこんな苦しい思いを、もうさらさらしたくないという気持になり、『朱夏』は永久に文字とはならず、私の心のなかだけで終っていたのではなかろうか。

（「すばる」と私の二十五年」『記憶の断片』より）



53年ぶりに訪れた中国東北部で／写真提供　朝日新聞社

あの夕陽は、子供の頃吹きガラスのポペン工場で見た、オレンジいろに溶けたガラスの玉の何百倍何千倍かと思い、円周が焼けただれ、炎をあげながらも、まるで坩堝とも思える地球の芯に向ってまっすぐに陥ちていった様子はどこか暗示的だとさえ思った。気がつくといつのまにか綾子は涙を流しており、その涙を指の裏で拭いながら何故ともなく、この土地で暮す自分の運命を甘受しなければならないと思うのであった。

――『朱夏』より

「すばる」1985年4月号 徹底インタビュー
「文学いごっそう―それは満州体験から始まった―」（抜粋）

聞き手　嶋岡晨

――「朱夏」、とうとう最終回ですね。たいへんな長丁場で、ご苦労さまでした。

今回あらためて「朱夏」を最初からずっと通して読ませていただいたんですが、これが、じつにおもしろかった。ことに後半、ひきずり込まれて夢中で読みましたけれど……。宮尾文学の一番大事なところが出てくるぞ、という期待。そしてじっさい期待どおりで、非常にショックだったんですが。

宮尾　それはどうしてですか。

――宮尾さんはいろんな世界を小説に描いてこられたんだけども、その中で一番重みのある文学表現の世界と言えば、やはり「櫂」を出発点にしたいわゆる私小説的な世界ですね。お父さんのご商売と娼妓の世界、本来は表に出したくないような恥部を思い切って表に出したというところに、宮尾さんの世界の独自性もあったと思うんです。そういうものを持っている強さ、あるいは魅力とはまた別に、宮尾さんの文学の基本になるようなもの、「これはどうしても書かなくちゃいけない」というもう一つの核心のようなものが大きく掘り出された、えぐり出されたという感じが、今度の「朱夏」でしたわけです。

（略）

簡単に言っちゃえば、これは地獄そのものですね。同じ地獄にしても「櫂」その他の娼妓物の世界だと、綾子は、わきから距離を置いて眺めることができたし、それからさっと逃げ出すこともできた。ところがこの満州体験というのは、絶対逃げられない。非常に厳しい時代状況とか、社会の枠組みとかがあって、けっして逃げられないですね。さっきも言いましたが、あるエッセイの中で最初は満州の体験を書きたくて小説を書き始めた、と告白しておられたんだけど、何で今までこの貴重な素材が寝かされなきゃならなかったか。そこら辺のことをまず、伺ってみたいわけです。

（略）

宮尾　いや、苦労したのはお前さんだけじゃないよ。内地にいる者だってすごい苦労したから、何も満州だけが苦労じゃないよという……。そこで私はちょっと萎縮したんです。話しちゃいけないかなという感じはあったんです。私の実家の方も見る影もなく落ちぶれていましたし、自分の知る限りの人は、人間が変わったような感じを持ちましたのでね、戦争によって。そこで意気揚々と引き揚げてきた自分の気持がしぼんだんです。

（略）

宮尾　しかし「櫂」を書いてからは、私が根底から覆されたみたいな感じがありまして、豚肉の話にしても、なぜあのときの綾子は薪しか拾うことができなかったのかと、そういうもっと物事の根源、あるいはそれに対するときの自分の考えのあり方みたいなものに対して、もっと深く考えるようになったということが一つあります。力もなかったし、姿勢もちがったということでしょうね。

――それまでは、単なる素材としておもしろがっていたわけですね、ご自分の体験の部分、部分を。

宮尾　そうです。だから満州から帰ってきて私がみんなに話しても、周りのみんながそれを聞きたくなかったというのは、私の中にとってもおもしろいことをしたんだぞ、見世物だから見せてやるみたいな言い方があったんじゃないかと、いまは思いますね。

（略）

宮尾　惨めだからいやというんじゃないけれども、一人娘でわがままに育ってきた人間が、あそこで開拓団の人たちにおとしめられて暮したという感じがありますわね。とっても言葉は悪いけれど要するに、あの当時のあの集団の中では教師なんてのは知的階級ですから。開拓団の人たちよりは自分たちの方がもっと上だという、いわば不遜な気持ちがずっとあったわけでしょう。それが何も物を持ってなくて、裸一貫になったときに、どんな扱いを受けるかということが身にしみてよくわかり、耐えられなかったですね。

――「史上最低の避難民」というような、そういう生活。

宮尾　そうなんです。それから、あれで書きたかったことは、このごろいろんな戦争体験記が出てきまして、満州の体験記も手元に集めて何十冊も持っており、どれも拝見しました。だけど、それはそこに一つ起った事象といいますか、現象といいますか、そういう面に視線を当てて書いているので、結局物もなかったから、だれかが死んでいったとかいうふうなことを書かれてあるのが多いですね。むろん、私たちよりひどい目に遭った人があるかもしれない。現に手記を読むとあるんです。早い話が、私たちは、子供を連れて朝鮮縦断するといったような一大壮挙はやっていませんわね。結局、すぐに営城子に逃げこんで、一年間雨露をしのぐ屋根の下で暮らしたわけですから。そのかわり、最低生活が生み出す、人間の感情を食い荒らす、ものなかに投げ込まれてしまったという感じがするんです。

――そのあたりは、さすが小説家として、よくえぐり出されていると思うんです。

宮尾　まだ十分は……。

――人間の醜さとか、いやらしさとかいうものをね。――それは単なる記録では出てこないでしょう。

宮尾　はい。記録じゃないものを……。あの中で学校関係者十人ぐらいが一団となって心あわせていたら、私はもうちょっと生きる道もあったんだと思うんですけど、結局みんながばらばらになるでしょう。敵中に一人いるような感じで、終わりまであそこの生活をやってたんですけれど、そういう人間関係をむしばんでいくというものを書きたかったわけです。

（略）

――〝大河小説〟という形式があるわけですけれど、そういうものを全体的に結果として構想するような意図はお持ちですか。つまり、「櫂」の綾子が「朱夏」に今度出てくるでしょう。個々の長篇を全体的につなげると、いつのまにか大河小説になっているというような――。

宮尾　それはなるでしょうね。

――おもしろいと思うんですよね。

宮尾　だって「櫂」の続編を書くようにと随分要望がありましてね。それを書かなくちゃいけないと思っています。綾子青春編をね。それから、満州体験を書くなら、引きあげて帰ってきた人が内地でその後どんな生活しているかを、書かなきゃ、私、やっぱり本当じゃないと思うのね。（略）

――一九八五・二・六――

『仁淀川』



平成12（2000）年12月　新潮社刊
「新潮」に1998年1月号から2000年2月号まで連載。

満州で敗戦を迎え、夫と幼い娘とともに裸同然で引き揚げてきた二十歳の綾子は、仁淀川のほとりの夫の生家で暮らし始める。

慣れない農作業や田舎の因習に苦しみ、農村での生活に疲れてゆく綾子はやがて病に倒れる。

戦後、尾羽打ち枯らした岩伍と対照的に生き生きとうどん屋を営む喜和の姿がまぶしく、父母の綾子への慈愛の心が胸を打つ。

そして、最愛の母・喜和と父・岩伍の死を乗り越えて、書くことに喜びを見出していく様が描かれて自伝的四部作は幕を閉じる。

私たち親子三人は九死に一生を得て日本に帰ることが出来たが、婚家先の門前を流れる仁淀川を目にしたときの感動は生涯忘れるものではない。

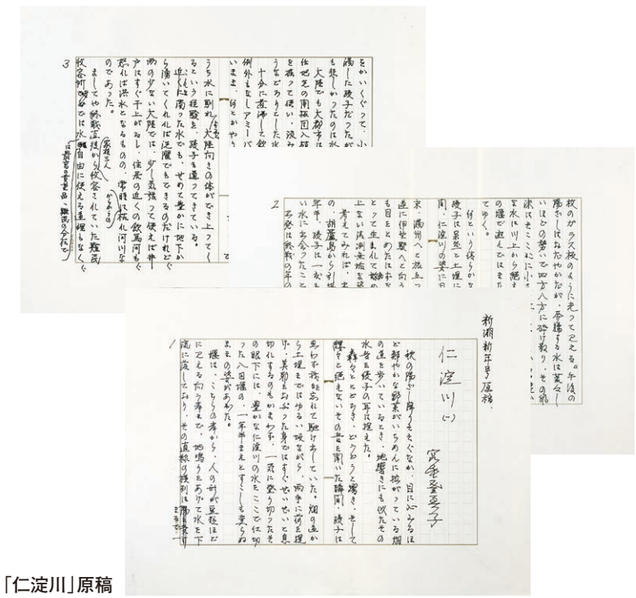
仁淀川は八田堰でせきとめられ、用水として広く田畑をうるおしているのだが、引揚げ列車から下り、その堂々たる堰の音を聞いて、私は思わず土堤を駈け上った。

そこで見た青い清冽な川の水は、飛翔し、奔騰し、そして互いに歓喜しながら河口へと目指す美しい日本の水の姿だったのである。

（「ふるさとの水」
『生きてゆく力』文庫版より）

ここは正しく水のきれいな日本、日本のなかの高知県、高知県の吾川郡、吾川郡の仁淀川の岸にいま、あたしはいる、といく度もひとつひとつ自分に向っていい、その言葉がまるで酒の酔いのように体のすみずみまでをめぐったとき、綾子はいい知れぬほどの安堵をおぼえた。

――『仁淀川』より



「仁淀川」原稿

「波」2001年1月号／新潮社
新春対談　わがままに生きて（抜粋）

宮尾登美子／檀 ふみ

宮尾　今度の『仁淀川』は、綾子が満州から引揚げてきて、高知県吾川郡の、仁淀川のほとりの夫の実家で暮らす話なのだけれど、読者は、農村の昔の話なんか読みたくないんじゃないかという不安がずうっと頭にあったの。

檀さんにお尋ねしたいけれど、綾子が姑に言われて、すごく悩んで、あとから喜和に頼んで嫁入り箪笥を買ってもらうでしょう。姑に箪笥がない嫁と言われるのが死ぬほどつらいの。そういうことが理解できる？　滑稽じゃなかったですか？

檀　滑稽ではないです。箪笥を持ってこない嫁っていじめられて、箪笥さえあればどんなにいいだろうと思う気持はわかります。ただ、お父さまが、結婚当初お金をくれていたわけでしょう、時節がら箪笥は手に入りにくいからって。綾子の気質から考えると、そういうことで割り切れるのではないかと思ったりもしたんですが……。

宮尾　そうすべきよね。本当は割り切るべきなんですけど。

檀　でも、針のむしろに立たされるわけですものね、田舎ですからね。

宮尾　あれで私はうんと悩んだ。でも、姑としても、農村に暮らしていて、箪笥のない嫁が来たということは、隣近所に対してすごく恥ずかしいことだったんです。

檀　自分の娘にも八年かかって箪笥を買ってあげる人ですからね。

宮尾　そうそう。だからそれを若い人が、どんなふうに受けとってくれるかと。

檀　私は、農村の場面を非常におもしろく読みました。綾子が嫌々、蚕の世話をして、とれた糸でお姑さんが織物をするという、その確かさみたいなものも非常に好きだし、蚕は一生好きになれない綾子の気持もよくわかるし。綾子の行動がおもしろいから、お姑さんに怒鳴られて農作業に出ていく場面も、なんだか爽快感があるんですよね。あれで二人で一生懸命働いちゃったりしたら、ちょっと苦しい、ぐき過ぎの話だと思うんでしょうけれど。

宮尾　満州から帰ってきたときに、働かなくちゃならないという使命感に燃えて、芋飴焚いたりして売るでしょう。それも途中でついえてしまって、結局何もできなかったんですよね。最後には自分で経済的に自立するには小説を書くしかないというところへたどりつくんですけれどもね。

（略）

檀　『仁淀川』には、綾子が作家になりそうだという、その芽が初めて出てくるんですね。終わりころにね。

宮尾　宮尾先生が小説の中に、フィクションとノンフィクションをどのくらいの割合で混ぜていらっしゃるのかわからないのですけれども、やっぱり周りの環境が、先生を小説家にさせようとして、すべてを与えてきた感じがしますよね。

檀　神様のご指示というのか、私に与えられた運命だったのでしょうね。それと、父と母が早くに亡くなったということが非常によかったのね。いつまでも父と母が私にくっついて甘やかしていたら、作家にはなってないと思います。『仁淀川』にも書きましたけれども、父が亡くなって対面した後で、綾子が一たん帰って出直してくるって、実家を出るでしょう。そのとき、涙は流れるんですけれども、もうそれこそ空が広いな、これから先、自分の前途にすごく広い豊かな世界が広がっているなという感じは、うんとしたんですね。

（略）

宮尾　じつは『春燈』も『仁淀川』も書くのは気がすすまなかったんですよね。主人公の綾子が余りわがままで恥ずかしくて。

檀　（笑）余りわがままって、ご自分のことだから、殊さらに厳しくお書きになっている感じがしますけど。

宮尾　あれは本当に事実に近いのよ。

檀　たとえわがままでも、いつも前のめりに進んでいく綾子はすてきですよ。そして綾子の周りの人たちが、またすごく魅力的ですよね。

宮尾　それは綾子にとって幸せね。みんなに支えられてね。それから、父が乗り移っているぐらいに、綾子は父と同じ性格で、周りの人に対して情が深くて、だからわがままも通っていたんでしょうかね。

檀　『櫂』も『春燈』も『朱夏』も、ま、宮尾先生の作品は全部そうなんですけれども、いつも感心するのは、本当に時代の匂いをそのままに立ち上がらせるのがお上手なんですね。ご自分のことは、記憶だけで書いていらっしゃるんですか。

宮尾　自分のことはほとんど全部記憶。歴史年表と、当時のものの値段が書かれたものは参考にしていますけれども。

（略）

檀　『櫂』のシリーズは、どのあたりまで書くと決めていらっしゃるんですか。

宮尾　これは新潮社に迫られてね（笑）、『仁淀川』までは書きました。このあと離婚して、また結婚しますわね。それから東京へ出てきて、どん底生活があって、とまだまだ続くわけですよ。書くという覚悟はまだできてないんです。だけど、きっと新潮社は迫ると思う。

檀　いや、私も迫る（笑）。読みたい。

宮尾　でも、綾子は私自身だから、もう反省することばっかりで。

檀　いえいえ、作家になるまでの二十六年間はぜひ書いていただかないと。太宰賞をもらって滂沱の涙というところまで書いていただきたいですよね。だって、読者は辛抱して、わがままな綾子にここまでつき合ってきたんですから（笑）。

宮尾　それはそうね。ありがたき幸せにござりまする。本当に（笑）。

『岩伍覚え書』



昭和52（1977）年1月
筑摩書房刊
1975年7月～1976年10月にかけて
「文芸展望」に4回にわたり掲載。

土佐の遊郭を舞台に、人助けの信念を貫き、芸妓娼妓紹介業を営む富田岩伍。

前渡し金をだまし取ろうと企む夫婦、家の零落で苦界に落ちるも互いに助け合う三姉妹、博徒同士の争いに翻弄される娼妓…。身売りの世界におぼれていく女の哀しくもたくましい「生」を、大正末期から昭和十年代の時代背景とともに岩伍の透徹したまなざしで描く。

「櫂」で両親のことを書き、家の職業について、さらに踏み込んで知りたいと思い、日記を開いてみますと、そこには歴然と生きたままの父の姿がありました。

日記のなかの父は、私が幼いとき感じたような傲慢なひと非情のひと、ではなく、職業を通じて少しでも他人が幸福になれるよう、身を挺して励んだ様子がうかがわれ、それを読んだ私は何ともいえず複雑な気持ちでした。

私が、半生を恥としてきた家の職業について、日記のなかの男はこれを天職と心得、胸を張って精いっぱいの努力を払ったらしいふしが読み取れたのです。

私は、この日記のなかからいくつかの話を抽出し、「岩伍覚え書」として四つのオムニバスの小説を書きました。

（『岩伍覚え書』文庫版あとがきより）

『寒椿』



昭和52（1977）年4月
中央公論社刊
「海」に1976年1月号から12月号まで連載。
第16回女流文学賞受賞

高知の芸妓子方屋「松崎」にほぼ同時期に預けられ、姉妹のように育ち、やがて花柳界に身を投じることになる四人の少女たち。その人生が「小奴の澄子」「久千代の民江」「花勇の貞子」「染弥の妙子」の四章のオムニバス形式で描かれる。戦争へと突入していく時代の中、運命に流され、明暗を分けていく少女たちの生涯を松崎の一人娘・悦子が見つめる。

四人の半生を振り返ってみればりりしさ、雄々しさ、激しさ、美しさに充ちており、その生きかたは俳句の、

大雪にうずもれて咲く寒椿

の姿を思わせるものがあった。

彼女たちはいずれも貧乏な家に生れ、身売りという逆境に育ち、世の荒波にもまれながら生きてゆくのだが、それはちょうど、いちめんの積雪に埋れながらなお花ひらく寒椿の凛冽たるおもむきがあった。

（「椿」『女のあしおと』より）



賞状

宮尾登美子殿

第十六回女流文学賞日選考の結果
貴作「寒椿」に贈られることに決定
いたしました
ここに賞牌と賞金を呈上いたします

昭和五十二年十月八日

中央公論社

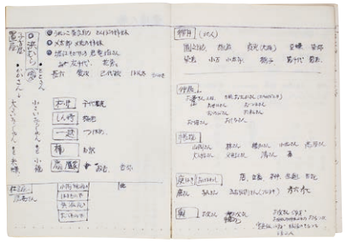


第16回女流文学賞の賞状と、副賞のミキモトの真珠の指輪

『陽暉楼』



昭和51（1976）年7月
筑摩書房刊
「展望」1975年1月号から
1976年6月号まで連載。



「陽暉楼」創作ノート
昭和49（1974）年

舞の名手として土佐随一の大料亭・陽暉楼の看板芸妓となった房子。十二の年から苦界に生きる房子の運命は、一人の客との出会いから思わぬ方向へと流されていく。

過酷な運命に翻弄されながらも、女性としての頑なまでに一途な房子の生きざまと、同時代に生きる女性たちの哀歓が描かれた作品。

書きあげてのち、いく度か読み返してみて、私が何故あれだけ燃えてこれを書きたかったのか、と考えると、桃若さんの薄幸な生涯もさることながら、いまは亡びてしまった妓楼文化というものを書き残しておきたい気持でもあったと思われる。

人身売買というシステムの上に立った、一見華やかで豪華な文化は、当然亡ぶべき雲面でもあったろうが、そこにちりばめられた女の涙をも含めて、小説ふうに記録としてとどめおきたかったのではなかろうか。

（〈文庫版あとがき　桃若さんの思い出〉『陽暉楼』ちくま文庫より）

『鬼龍院花子の生涯』



昭和55（1980）年1月
文藝春秋刊
「別冊文藝春秋」145号から149号に連載（1978年9月～1979年9月）。

強烈な個性を放つ鬼龍院政五郎こと通称鬼政の豪快な人生、任侠の道を貫く鬼政一家の隆盛と凋落、鬼政の愛娘・花子の哀れな生涯が、理知的な養女・松恵の目を通して語られる。

父・猛吾の日記に実在の侠客・鬼頭良之助が借金の申込にきた記述を見つけ、調べていくうちに次々と個性ある人物が浮かび上がって来、執筆されたという。



「鬼龍院花子の生涯」原稿
最終稿とみられる。

『影絵』



昭和53（1978）年6月
筑摩書房刊
女流新人賞を受賞した「連」の他、1970年代に発表した中短編を収録。

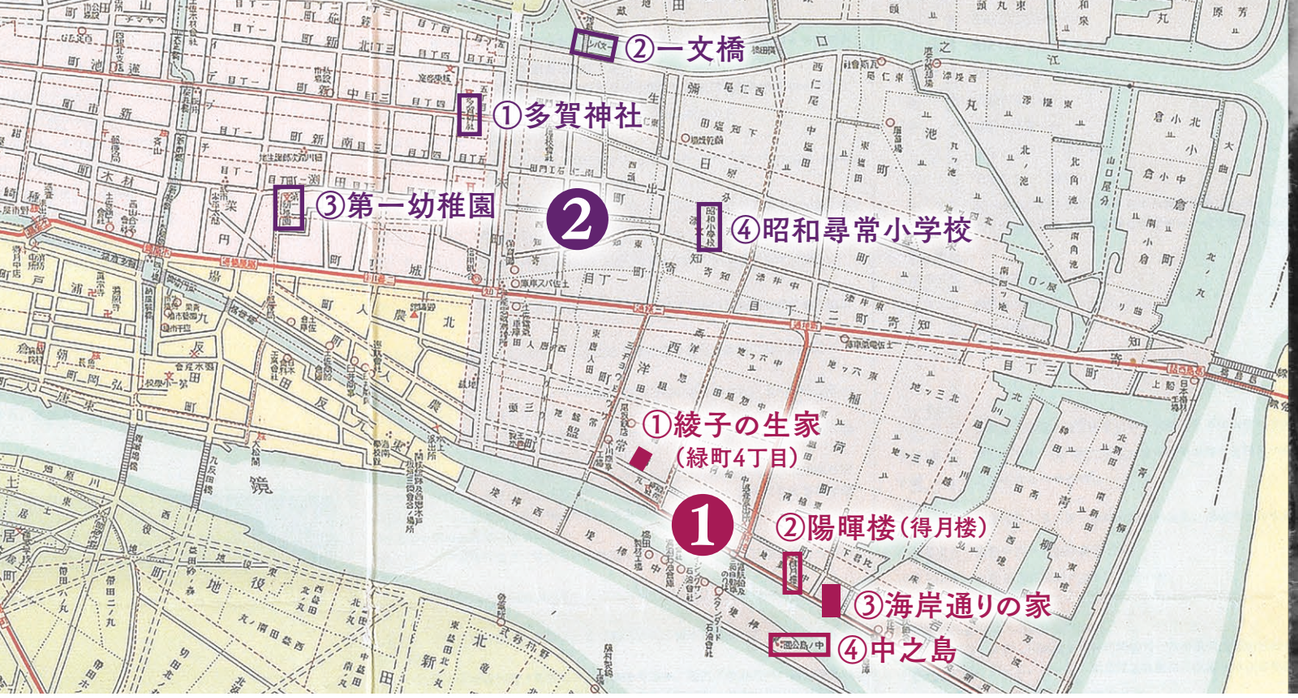
収録作品
「連」
「卯の花くたし」
「影絵」
「夜汽車」

「卯の花くたし」「影絵」「夜汽車」はいずれも娼妓の世界を描いた作品。

「夜汽車」は、住替えの妓二人を大阪まで送る話で、『春燈』の綾子のエピソードとしても出てくる。



「影絵」原稿





大正初期の追手門と高知城

1 現・二葉町～若松町

①綾子の生家（緑町4丁目）

富田家が暮らす家。「芸妓娼妓紹介業」を商う。岩伍・喜和の夫婦に結核を患う長男・龍太郎、高知一中に通う次男・健太郎、そして綾子とともに、大勢の寄宿人や養女の菊と絹が暮らす。この家で長男龍太郎は亡くなり、健太郎は結婚し、菊・絹は嫁入った。（『櫂』『春燈』）

②陽暉楼（得月楼）

南海随一の料亭。岩伍の商売の得意先。（『櫂』『春燈』『岩伍覚え書』）『陽暉楼』の房子が抱えられている店。「この頃高知の町に検番制度はまだ出来ておらず、従って料理屋が茶屋の役目も果せば待合も兼ね、他家とは交流のない自家専門の芸妓も抱えていれば、それに関わるさまざまな職業の人間もすっかり傘下に収めていたから、この海岸通り一体は殆ど本店の息の掛かった者が寄り集まっているのであった。」（『陽暉楼』）



得月楼本店

③海岸通りの家

喜和が大病をした後、岩伍・喜和・綾子の親子三人で移ってきた家。陽暉楼からほど近い、潮の香がさわやかなこの家で親子睦まじくおだやかな明け暮れを過ごすが、家に四人の仕込っ子が来た頃から少しずつ変化が訪れる。（『櫂』『春燈』）

④中之島

陽暉楼本店がある海岸通りの向かい側。『陽暉楼』房子は中之島の蛇籠の上にいつも鴉（からす）が一羽止まっているのを何となく哀れを覚えてときとき立ち止まって眺めていた。鴉は房子の最期の場面でも登場する重要なモチーフ。（『陽暉楼』）

2 現・宝永町～城見町～日の出町

①多賀神社

岩伍と喜和の出会いの場所。喜和はお多賀様の夏祭で、十人抜きの青年相撲に勝ち抜いている岩伍を見て以来、自分は岩伍と夫婦になるものと思い決めてしまった。（『櫂』）

②一文橋

一文橋には首無し馬のお化けが出るという。喜和は少女時代、空いちめん、お不動様の口の中のようにどっぷりと朱に染まって燃え上がる中を漆黒の首無し馬が前足で虚空を掻いて跳ね上っているのを見た。（『櫂』）

③第一幼稚園

綾子が通った幼稚園。当時は幼稚園に通わせる親は少なかった。（『春燈』）

④昭和尋常小学校

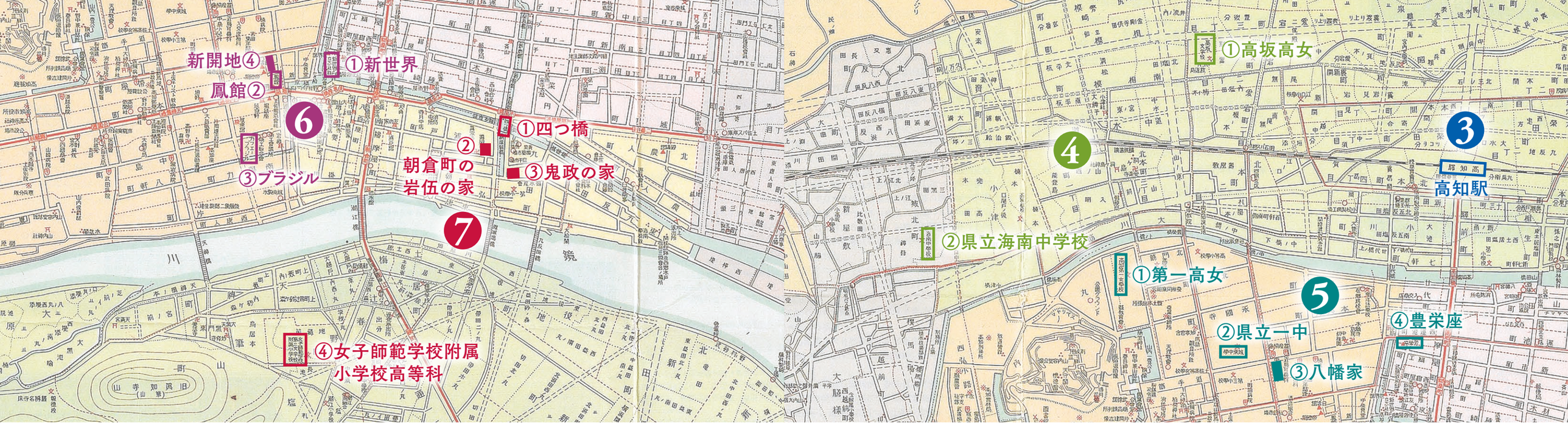
綾子が通った小学校。小学2年の春、受け持ちの先生の家庭訪問で、先生が何気なくいった「あらほんと、看板が見えよる」の言葉に、家業の恥ずべきことを敏感に感じ取ってしまった。（『春燈』）



昭和尋常小学校



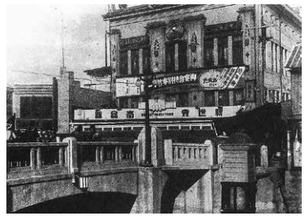
最新大高知市街地図（1935（昭和10）年11月／高知興信所刊）高知県立図書館蔵



6 新京橋周辺

①新世界

龍太郎が結核と診断された後、新世界に立ち寄り、大正琴と撥を買い求めた。離婚後家を出る際に喜和は龍太郎の遺品である撥をそっと自分の蝦蟇口にいれた。
新世界は今でいうショッピングモール。(『櫂』)


新世界

②鳳館

『寒椿』で、仕込っ子の澄子が貞子、妙子、民江と家の娘の悦子を引き連れて電車に乗って出かけた活動館。後年、民江が大連で出会う恋人の映画俳優・高井昌平の活動写真も観た。活動館は他に世界館、大山館などがあった。(『寒椿』)

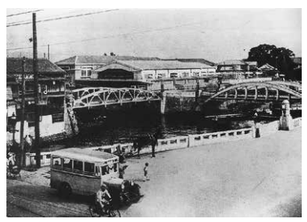
③ブラジル

京町にできたハイカラな構えの店で金地気の出た番茶のように真黒な、苦いコーヒーという飲み物を売っているという話を聞いた長患いの龍太郎が病の身で一人訪れ、喜和を困らせた。(『櫂』)
※作中の位置では「世界館のわき」となっている。

④新開地

鳳館裏小路を入り帯屋町に抜ける一帯のこと。『陽暉楼』で流連をしていた佐賀野井と房子が連れ立って出かけ、羽子板を買ってもらった。(『陽暉楼』)

7 現・はりまや町付近、塩屋崎町


四つ橋

①四つ橋

木屋橋、幡多倉橋、納屋堀橋、菜園場橋の4つの橋がかかっていたので、通称四つ橋と呼ぶ。喜和は四つ橋の南の橋に立ち、朝倉町の岩伍の家へと帰る綾子を見送った。(『櫂』)

②朝倉町の岩伍の家

喜和と別れた岩伍はこの家で後添いの照とその連れ子の譲、恒子と暮らす。女学校受験のため、綾子は喜和のもとを離れ、岩伍の家に帰った。(『櫂』『春燈』)

③鬼政の家

『鬼龍院花子の生涯』の鬼政こと鬼龍院政五郎が侠客の看板をかかげた家。九反田上市場の南隣。
(『鬼龍院花子の生涯』)

④女子師範学校附属小学校高等科

第一高等女学校の受験に失敗した綾子が2年間通った学校。女子師範、第二高女と併設。綾子はここで親友・規子との出会い、教育実習生とのいざこざ、教師への反発など様々な感情を抱きながら成長していく。(『春燈』)

3 高知駅

女学校卒業後の進路に悩む綾子は家出をたくらみ、大阪の飛田遊郭に住み替える妓二人を連れてゆく役を引き受け、高知駅から大阪駅まで旅をした。「夜汽車」では綾子ではなく、鞍子。(『春燈』「夜汽車」)

4 現・城北町～相模町


高坂高等女学校

①高坂高女(高坂高等女学校) ※現在の愛宕中学校の位置にあった。

綾子が二度の県立高女受験に失敗した後、3年次に編入。新たな友人との出会い、進学の悩み、教師との軋轢など、多感な青春時代を送る。(『春燈』)

②県立海南中学校

現・高知小津高校。岩伍が再婚した照の連れ子・譲がみごと合格し、進学した伝統ある県立中学校。第一高女の受験に失敗した綾子にとってくやしくもまぶしい存在。(『春燈』)

5 現・丸ノ内～追手筋～中の橋通



昭和27(1952)年　八幡家があった中の橋通

①第一高女(県立高知第一高等女学校)

現・高知丸の内高校。県下一の女学校。両親の離婚や母との別れという不安定な状況の中で受験した綾子は不合格。成績優秀だった綾子の不合格は家業のせいという噂を耳にし、劣等感に苦しむ。(『春燈』)

②県立一中(県立第一中学校)

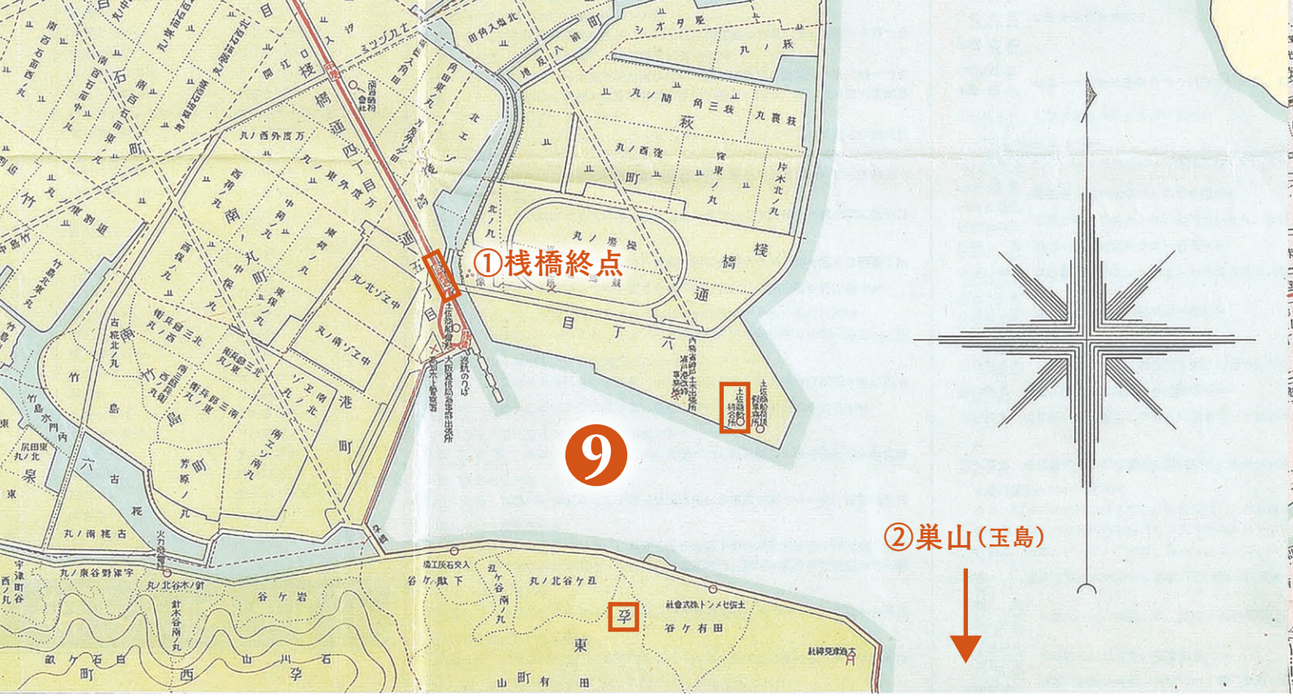
現・高知追手前高校。県立一中は何度か名称が変わっており、地図上の名称は城東中学校。県下一の名門校。綾子の兄の健太郎が通うも、素行不良で退学。母・喜和を苦しめた。(『櫂』)

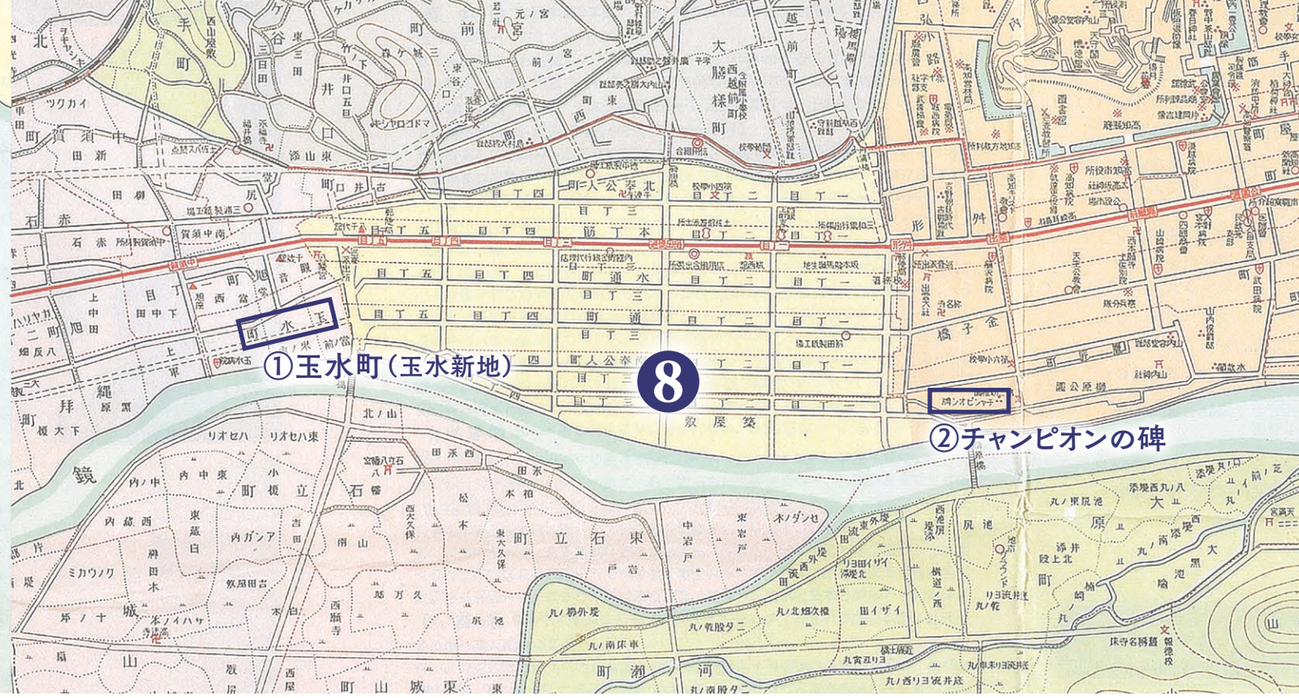
③八幡家

岩伍との離婚に際し、繁盛していた店を居抜きで買い取り、喜和が切り盛りするうどん屋。八幡家での喜和は見違えるほど活き活きとして働いている。(『櫂』『春燈』『仁淀川』)

④豊栄座 ※地図上は苦栄座

岩伍の愛人・巴吉太夫が高座にあがる。龍太郎を追手筋の楠病院に連れていった帰り、喜和はここで、筆太のりんりんとした字体の巴吉太夫の幟の裾に「富田より」と書かれているのを見てしまう。(『櫂』)

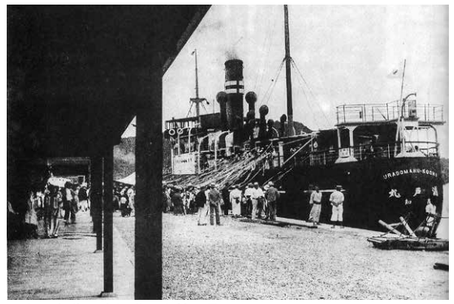




9 桟橋～浦戸湾

①桟橋終点

『陽暉楼』の房子が、恋い慕う南海銀行の若様・佐賀野井の洋行を影ながら見送るために降り立った駅。店近くの新地終点から電車に乗り込み、途中二度の乗り換えを経て桟橋終点に到着したとき、出船の銅鑼（どら）が鳴った。船は岸壁を離れた後、大きく迂回して孕（はらみ）の山陰に消えていく。（『陽暉楼』）



昭和10年代　高知港の出航風景

②巣山（玉島）

浦戸湾を南下した位置にあるため地図上に描かれていない。『岩伍覚え書』の「三日月次郎一件について」で、岩伍が三日月次郎と対決した島。息子の龍太郎と健太郎を乗せて浦戸湾でニロギ釣りを楽しんでいたところ、因縁の相手と遭遇。相手から決闘を申し込まれた。（『岩伍覚え書』「三日月次郎一件について」）

写真出典

1-② 得月楼本店	『写真アルバム 高知市の昭和』	2014年	樹林舎刊
2-④ 昭和尋常小学校	昭和尋常小学校卒業記念写真帖（昭和9年）		
4-① 高坂高等女学校	『目で見る高知・南国の100年』	2007年	郷土出版社刊
5-③ 中の橋通	『TIME 100KOCHI　写真集　高知市・まちと人の100年』	1989年	高知・まちと人の100年101人委員会刊
6-① 新世界	『TIME 100KOCHI　写真集　高知市・まちと人の100年』	1989年	高知・まちと人の100年101人委員会刊
7-① 四つ橋	『TIME 100KOCHI　写真集　高知市・まちと人の100年』	1989年	高知・まちと人の100年101人委員会刊
8-② チャンピオン	『故フランクチャンピオン氏追悼記念写真帖』	1917年	高知新聞社刊　国会図書館デジタルコレクション
9-① 昭和10年代　高知港の出航風景	『TIME 100KOCHI　写真集　高知市・まちと人の100年』	1989年	高知・まちと人の100年101人委員会刊

8 現・玉水町、鷹匠町

①玉水町（玉水新地）

鏡川に面して丸山楼や尾上楼といった遊郭が軒を連ねる。『岩伍覚え書』「博徒あしらいについて」では丸山楼の娼妓・牡丹を取り合い、相撲取りの玉錦も巻き込んでの大騒動となった。（『岩伍覚え書』「博徒あしらいについて」）

②チャンピオンの碑

飛行家フランク・チャンピオンは鬼政主催の飛行会に招かれ、朝倉練兵場で宙返りなどの曲芸を披露し、観客を熱狂させたが、墜落。鬼政は朱に染まってこと切れているチャンピオンをかき抱くようにして号泣。鬼政は実在の鬼頭良之助をモデルにしており、チャンピオンも実在の人物で、作中描かれているのは実際に起きた飛行機事故。（『鬼龍院花子の生涯』）



大正6（1917）年10月30日、事故前に握手する鬼頭（鬼政のモデル）とチャンピオン

「婦人公論」2008年7月号　特別インタビュー

私が女を書く理由

宮尾登美子

女として生まれたからには、結婚して夫に仕え、舅や姑の言うことをよく聞き、立派な子どもを産んでその子を兵隊さんにし、老いては子に従う。大正末に生まれ、昭和十年代に青春時代を送った私は、まさに「軍国少女」として育てられました。人生や職業の選択などもっての他。女性が何かに対して意見を言うことすら憚られる時代でした。十代の私は、そんな時代に疑問を持つ一方で、周りを見ると、世の中の秩序のなかで、一生懸命生きている女性がいることにも気がついていました。人生や運命に抗うわけでもなく、作法と倫理を守りながら、懸命に生きる。作家になった私が、作品の主人公として取り上げるのは、少女時代に見た、そんな女性たちが原点となっているのかもしれません。

女性の生き方というのは、その時代に反映されるものです。それは戦前であろうと戦後であろうと、現代でも同じ。与えられた環境のなかで粘り強く、より良い方向を目指していく。それは女性だからこそ可能な、そして女性ならではの素晴らしい生き方だと思います。『天璋院篤姫』を書いている時も、調べれば調べるほど、篤姫を取り巻く環境の窮屈さに唖然としました。幕末の変動期にあって、篤姫は大奥から外に出て、どれだけ徳川の家臣たちと話をしたかったことでしょう。書きながら歯がゆくなったものです。でも、それはできないこと。だからこそ、大奥という環境のなかで、精一杯生きる篤姫を作り上げたのです。

篤姫もそうでしたが、十年、二十年とその女性に対する思いを温め続け、資料などを充分に調べ終えたとき、はじめて原稿用紙に向かう。私はずっとそんな調子で書いてきました。書いてみたい女性は、まだ大勢います。懸命に生きた女性を現代に甦らせるためにも、私はまた、原稿用紙に向かおうと思っています。（談）

第三章　女性の生き方をみつめて

『櫂』以降、家業にまつわる女性に焦点をあてて描いてきた宮尾文学の新たな方向性を示したのが『二絃の琴』でした。

同じ高知を舞台にした作品ではあっても、一絃琴演奏という一芸に打ち込んだ実在の女性二人をモデルにその生涯と相克を描き著者自身の身辺を離れてより芸術的な作品世界が構築されました。

これ以後、作品の舞台は土佐から離れ、さらに宮尾文学の世界を広げていきます。

『二絃の琴』の次に手掛けた『伽羅の香』では三重の山林王の一人娘で、香道の復活に生涯を捧げた女性をヒロインとして描き、『序の舞』では圧倒的男性優位の日本画の世界で愛に苦悩しながらも前人未踏の美人画の境地に到達した女性を、『きのね』では、梨園の世界で、愛する人のためにひたすらに耐え、尽くし、真実の愛を手に入れた一人の女性を描き、日本の伝統美や日本的風土を背景に、それぞれの女性が生きた道を丹念に辿り、現代へと蘇らせてきました。

宮尾文学のヒロインたちが、それぞれの世界で伝統や因習、その時代の倫理や作法を守りながらも、自分の信じる道をひたすらに歩み、ついにはその高みへと到達するその姿が多くの現代女性の心を打ち、長く愛される作品となっていきました。

『一絃の琴』

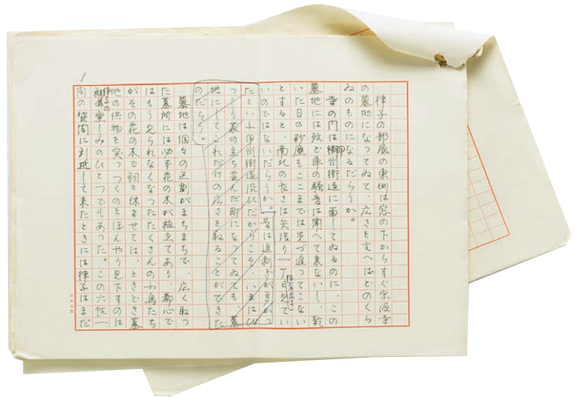


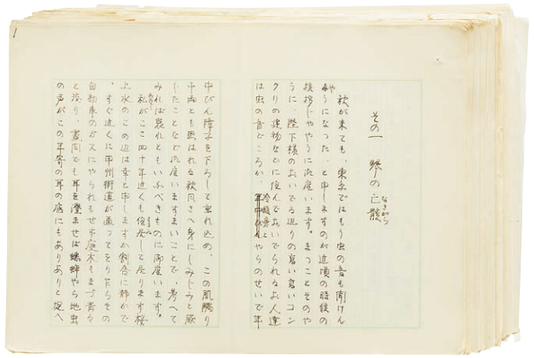
昭和53（1978）年10月　講談社
書き下ろし作品。
第80回直木賞受賞。

幕末から昭和への百二十年間の歴史を背景に、土佐に伝わる一絃琴に生涯をかけた女たちの矜持と情念が描きだされる。

五歳で旅絵師の弾く一絃琴に魅了された土佐藩上士の娘・苗。その出会いが彼女の人生を変える。思いを寄せる師・有伯に裏切られ、一度は一絃琴の修行を中断するが、再び名品に魅せられ、市橋流の塾を開く。

隆盛を極める塾に才能ある弟子・蘭子が現れ、二人の間に思わぬ確執が生まれる。





上下とも「一絃の琴」習作原稿
『一絃の琴』は上梓まで17年間の歳月をかけ、5度書きなおしたという。
当館には4種の習作原稿が残されている。完成稿は日本近代文学館が収蔵。



練習用の一絃琴とろかんと調子笛



秋沢久寿栄【1883―1968】
『一絃の琴』の蘭子のモデル。
高知県の無形文化財第1号。島田勝子に師事し、一絃琴演奏を学ぶ。
戦後、正曲一絃琴白鷺会を結成。
宮尾は昭和37年、78歳の秋沢久寿栄の演奏を聴いて以降、一絃琴を題材として温めつづけた。



第80回直木賞正賞の懐中時計

『伽羅の香』



昭和56（1981）年6月
中央公論社刊
「婦人公論」に1980年1月号から1981年4月号まで連載。
土佐以外の女性を描いた初めての長編。主人公のモデルは和歌山県出身で、香道の発展に力を尽くした山本霞月。

『序の舞』

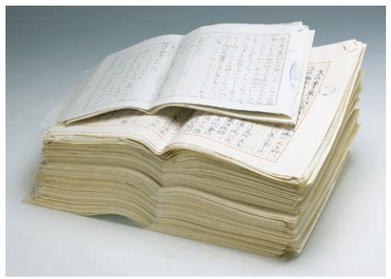


第17回吉川英治文学賞賞状





上下巻　昭和57（1982）年11月
朝日新聞社刊
朝日新聞夕刊に1981年5月11日から1982年8月28日まで連載。
女性初の文化勲章を受章した日本画家・上村松園をモデルに、明治～昭和にかけて、愛と芸術に苦悩しながらも画業を極めた女性の一生を描いた。
第17回吉川英治文学賞受賞。



「序の舞」完成稿
原稿用紙1176枚。

『松風の家』





上下巻　平成元（1989）年9月　文藝春秋刊
「文藝春秋」に1987年1月号から1989年3月号まで連載。
千利休を祖とする茶道の宗家の名家一族の、明治・大正における孤高の歩みを描いた作品。

『きのね』





上下巻　平成2（1990）年5月　朝日新聞社刊
朝日新聞朝刊に1988年9月1日から1989年11月22日まで連載。
歌舞伎役者の御曹司のもとに奉公に上がり、献身的に支え、戦中戦後の幾多の苦難を乗り越えて愛を成就させた女性の姿を描く。



「きのね」完成稿
原稿用紙1318枚。

『菊亭八百善の人びと』



平成3（1991）年10月　新潮社刊
読売新聞朝刊に1990年2月27日から1991年3月20日まで連載。
江戸時代から続く老舗の料亭「菊亭八百善」の戦後の再興にかける人々の姿を描いた作品。
※販元品切

宮尾登美子の歴史小説

宮尾の作家としての揺るがないテーマは「女の生きかた」。これは、戦前の男尊女卑・全体主義の空気の中で育った宮尾が、戦後、民主的な時代になったことで、これからの女性は自分の生き方を選択していかなくてはならないと痛感して、自身に課した生涯のテーマです。

歴史小説に分類される『東福門院和子の涙』『天璋院篤姫』『クレオパトラ』『宮尾本　平家物語』の四作品も、この「女の生きかた」という一貫したテーマの元に描かれています。

男性優位の歴史の中で、役割を持って生きた女性の姿を掘り起こし、ただの歴史上の人物としてではなく、現代の作家の視点でとらえた、現代の女性に通じる生き方として描いてきました。

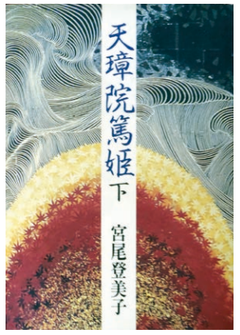
多大な資料を調査し、行間に想像力を膨らませ、歴史書の中には残らなかった女性たちの働き、生き様を見事に描き出し、歴史小説として結実させました。

宮尾文学の歴史小説に描かれた女性たちは、時代も違い、国も立場もそれぞれに違いますが、その時代、その場所、その立場で自分に出来るかぎりのやり方で精一杯生き、その生き方は決して過去のものではなく、現代を生きる女性へのエールともなっているのではないでしょうか。

『天璋院篤姫』



「天璋院篤姫」完成稿
原稿用紙上654枚、下402枚。





上下巻　昭和59（1984）年9月　講談社刊
日本経済新聞夕刊に1983年2月25日から1984年5月1日まで連載。
薩摩藩島津斉彬の養女から13代将軍徳川家定のもとに嫁ぎ、激動の幕末に徳川宗家のために生きた篤姫の生涯を描いた作品。

『東福門院和子（まさこ）の涙』



平成5（1993）年4月　講談社刊
「家庭画報」に1990年4月号から1993年3月号まで連載。
武家から朝廷に嫁いだ、2代将軍徳川秀忠の娘、和子の生涯を描いた作品。

『藏』





上下巻　平成5（1993）年9月　新潮社刊
毎日新聞朝刊に1992年3月26日から1993年4月26日まで連載。
新潟の旧家の蔵元一族の物語。盲目のヒロイン・烈は、創作の人物。
※版元品切

『天涯の花』



平成10（1998）年1月
集英社刊
学芸通信社により高知新聞、徳島新聞、秋田魁新報、信濃毎日新聞、中国新聞、熊本日日新聞、北國新聞、神戸新聞の各紙に、1996年8月25日から順次連載。

「天涯の花」
創作メモ

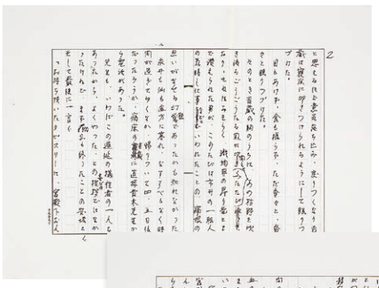


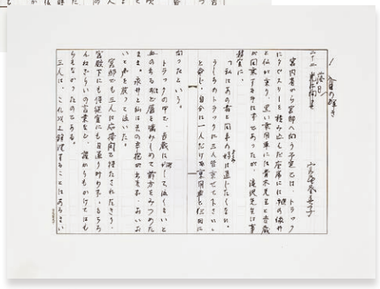
「天涯の花」完成稿
『天涯の花』は高知県と徳島県の県境の霊峰・剣山を舞台に、戦後、吉野川沿いの養護施設で育ち、剣山にある神社の養女となった少女の成長と恋を描いた作品。女性の一生を描く宮尾作品にはめずらしく、二十歳までしか描かれていない。『藏』と同じく、ヒロインは創作の女性。

『錦』



平成20（2008）年6月
中央公論新社刊
「中央公論」に2006年5月号から2008年3月号まで連載。
正倉院宝物の復元を手掛けた京都の織り師、初代龍村平蔵がモデル。
最後の長篇小説は男性が主人公だった。
第6回親鸞賞受賞。





「錦」原稿
全22回連載。当館では22回中18回分の原稿を所蔵している。

『湿地帯』



平成19（2007）年8月　新潮社刊
1962年の女流新人賞受賞の翌々年、高知新聞に連載された作品。43年の時を経て刊行された。※版元品切

『菊籬』



平成7（1995）年4月　文藝春秋刊／短編集
1948年脱稿の「村芝居」1962年発表の「水の城」の他、「彫物」「金魚」「自害」「千代丸」「菊籬」「宿毛にて　つつがき　猫　山川よ」を収録。

『クレオパトラ』



「クレオパトラ」完成稿
原稿用紙899枚。





上下巻　平成8(1996)年10月　朝日新聞社刊
朝日新聞日曜版に1993年10月3日から1996年3月31日まで連載された。宮尾唯一の外国人女性を描いた作品。

谷川泰宏画
クレオパトラ挿絵原画



第3章-7原画「失われた聖域」



第3章-28原画「また会う日まで」



第2章-5原画「戴冠の日」



第6章-6原画「神話の終わり」



第4章-19原画「艶奏曲」



第2章-13原画「聖蛇の標章」

『宮尾本 平家物語』



四、玄武之巻
平成16(2004)年4月
朝日新聞社刊



三、朱雀之巻
平成15(2003)年4月
朝日新聞社刊



二、白虎之巻
平成14(2002)年4月
朝日新聞社刊



一、青龍之巻
平成13(2001)年6月
朝日新聞社刊

(略)それでも是が非でも書きたいと思ったのは、この時代の女性が、男たちのあいだでまるで贈答品のようにやりとりされるのを読んで、憤慨に耐えなかったからだった。

平家の文章は、少女時代から暗唱しているほどに美しく、物語としての展開もみごとなものだが、ただ、人間の、とくに女性の心理描写というものが極めて少ない。私の使命は、黙して語らぬ彼女たちの胸のうちを、耳を澄まして聞き取ってあげることなので、これまでの三巻、それを心がけて来たのだが、さらに壇ノ浦の滅亡まで、まだまだ多くを語ってもらえそうである。

全巻完結は年末の予定だが、それまでの期間、スタート時からそうしてきたように、平清盛をまねて、折々の写経と毎朝の読経は欠かさず精進してゆくつもり。何といっても油断大敵、私にとって平家物語は畢生の難事業なのだから。

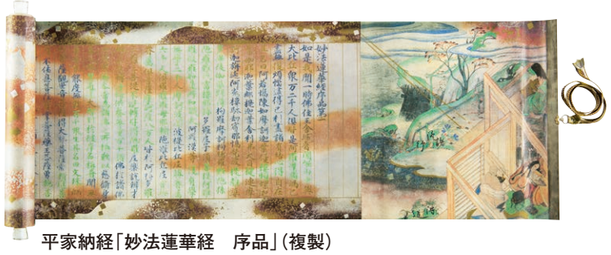
(「平家物語に挑む」『生きてゆく力』)



「宮尾本 平家物語」完成稿
原稿用紙3618枚。「週刊朝日」に1999年11月5日号から2003年11月28日号まで全201回連載。



「平家物語」創作ノート



平家納経「妙法蓮華経　序品」(複製)

第四章　めぐる季節を生きて

この章では、『櫂』で太宰治賞を受賞した47歳から菊池寛賞を受賞した82歳までの在りし日の写真の数々や、愛着を込めて作られた稀覯本や愛用の品々などをご紹介し、宮尾登美子が生きてきた人生の色彩を見つめます。

巻末には宮尾登美子年譜、出版目録（小説）、映像化・舞台化作品リスト、当館収蔵の宮尾登美子文庫資料リスト（草稿、ノート）を収録し、宮尾登美子の八十八年の生涯とその仕事を詳細に記録しました。

宮尾登美子が平成26（２０１４）年に亡くなって今年で十二年。今も多くのファンに読み継がれる宮尾作品の数々は、晩年に出版されたエッセイ集『生きてゆく力』のタイトルのとおり、これからも多くの読者の”生きてゆく力“となり、末長く愛されていくことでしょう。

エッセイ他



『美しきものへの巡礼』
昭和56（1981）年9月
文藝春秋刊



『女のあしおと』
昭和56（1981）年3月
講談社刊



『つむぎの糸』
昭和56（1981）年1月
高知新聞社刊



『母のたもと』
昭和55（1980）年3月
筑摩書房刊



『手とぼしの記』
昭和59（1984）年3月
朝日新聞社刊



『花のきもの』
昭和58（1983）年9月
講談社刊



『楊梅の熟れる頃』
昭和57（1982）年5月
文化出版局 ※1



『もう一つの出会い』
昭和57（1982）年2月
海竜社刊



『記憶の断片』
平成8（1996）年12月
飛鳥新社刊



『わたしの四季暦』
昭和63（1988）年1月
中央公論社刊



『女のこよみ』
昭和62（1987）年1月
講談社刊



『地に伏して花咲く』
昭和60（1985）年11月
シーズ刊



『もう一つの出会い』
新装愛蔵版
平成15（2003）年2月
海竜社刊



『めぐる季節を生きて』
平成14（2002）年5月
講談社刊



『きものがたり』
平成11（1999）年3月
世界文化社刊



『はずれの記』
平成10（1998）年4月
KADOKAWA刊 ※2



『楊梅の熟れる頃』
P+D Books
平成29（2017）年12月
小学館刊



『記憶の断片』
P+D Books
平成29（2017）年4月
小学館刊



『つむぎの糸』
増補改訂版
平成21（2009）年9月
高知新聞社刊



『生きてゆく力』
平成21（2009）年6月
海竜社刊

※1は現在絶版
※2は現在文庫電子版のみ発売中。カバーデザインは異なります。



平成15（2003）年6月、77歳
北海道伊達市の自宅書斎で。



平成8（1996）年6月、70歳
中央公論社写真部撮影



平成17（2005）年2月、78歳
高知県立文学館で開かれた「【宮尾本 平家物語】完結記念 宮尾登美子の世界展」で。



平成20（2008）年12月、82歳
菊池寛賞の贈呈式で、50年来の友人・英保迪惠さんと。



平成17（2005）年6月、79歳
岩手県盛岡市での講演会場で。



50歳の頃



昭和48（1973）年8月、47歳
太宰治賞受賞後、8年ぶりに帰郷し、高知市の夏季大学で講演。演題は「文学修行の条件、私の場合」。



昭和52（1977）年10月6日、51歳
軽井沢の別荘へ作家の野上弥生子（中央）を訪ねる。右が宮尾。



『櫂』サイン会



昭和54（1979）年1月、52歳
直木賞決定の翌日、夫の宮尾雅夫さんと。



昭和58（1983）年4月、56歳
吉川英治文学賞受賞パーティーで作家の宇野千代と。



平成元（1989）年11月、63歳
作家の加賀乙彦と講演旅行。



辻が花の訪問着
胸にかけての柄が華やかで、講演などで好んで着用した。



菊模様の絞り小紋
昭和54(1979)年1月19日、直木賞受賞決定の記者会見で着用した着物。



桜の訪問着
「お母さん」とも「人生の先達」とも慕った作家・宇野千代から贈られた着物。



蒔糊の地に吹き寄せ模様
講演会や会食などで愛用。



黒地に桜模様
『きものがたり』にも掲載されているお気に入りの着物。

稀覯本と愛用の品々



豆本
昭和61(1986)年～平成2(1990)年　未来工房制作
『夜汽車』『卯の花くたし』『花のきもの』『手とぼしの記』『女のこよみ』
『楊梅の熟れる頃』『つむぎの糸』
各種300冊発行された(『夜汽車』のみ250冊)。

豆本入れ　西村吉象堂制作
蓋の表には宮尾家の家紋、裏には金文字で自筆署名が入っている。
この中に豆本を入れて愛蔵していた。



愛用の印章と落款



『きものがたり』愛蔵版
表紙に愛蔵の着物生地を使用し、1冊1冊、
表紙の趣が違う稀覯本。限定250冊。



『クレオパトラ』特装本



愛用の万年筆



珊瑚の装飾品の数々
文学賞受賞時などには「祝う会」が開かれ、その都度贈られたもの。



愛用の腕時計　ヴァン クリーフ&アーペル社製
亡くなるまで大切に身に着けていたもの。

宮尾登美子　年譜

一九二六年（大正十五／昭和元）	○　歳	四月　十三日、高知市緑町四丁目（現・二葉町）に生まれる。戸籍上は父、岸田猛吾、母、喜世の三女。岸田家は「芸妓娼妓紹介業」を営む。
一九三二年（昭和七）	六　歳	四月　高知市立第一幼稚園に入園する。 病弱で一カ月に一度は医師の往診を受ける状態が続く。母、喜世の愛を一身に受ける母親っ子であった。
一九三三年（昭和八）	七　歳	四月　高知市立昭和尋常小学校に入学する。 家にあった『講談全集』『落語全集』などに親しむ。 夏　母が子宮筋腫で長期入院する。
一九三四年（昭和九）	八　歳	四月　海岸通り（現・若松町）へ引っ越す。
一九三八年（昭和十三）	十二歳	十一月　父母が離婚する。
一九三九年（昭和十四）	十三歳	二月　朝倉町の父のもとに移る。 県立第一高女を受験するも不合格。 四月　高知県女子師範学校附属小学校高等科に入学する。 家業のことで劣等感にさいなまれる。
一九四一年（昭和十六）	十五歳	四月　私立高坂高等女学校（三年）に編入する。
一九四二年（昭和十七）	十六歳	夏　肋膜炎と診断され、香美郡土佐山田町前行（現・香美市）に転地療養する。
一九四三年（昭和十八）	十七歳	三月　高坂高等女学校を卒業する。 四月　同校家政研究科に進学する。 十二月　中途退学し、吾川郡池川町（現・仁淀川町）安居国民学校に助教として就職する。
一九四四年（昭和十九）	十八歳	二月　池川町狩山国民学校に転任する。 三月　退職。同月、安居国民学校教員前田薫と結婚。池川町に新居を構える。 心臓神経症を患い、実家で療養する。 以後、長く神経症に悩まされる。 十一月　夫が大土佐開拓団の子女教育にあたるため単身満州（現・中国東北部）へ渡る。
一九四五年（昭和二十）	十九歳	二月　長女誕生。三月末、迎えに戻った夫とともに、長女を伴って満州に渡る。
一九四六年（昭和二十一）	二十歳	九月　十六日、親子三人、引き揚げ船で佐世保浦頭港へ上陸する。二十一日、高知へ帰る。伊野の引揚援護局出張所で手続きをする。夫の実家、吾川郡弘岡上ノ村（現・高知市春野町）で、夫の母と祖父とともに農業に従事する。
一九四七年（昭和二十二）	二十一歳	六月　肺結核と診断される。満州での体験を書き残しておきたく思い、同月十八日よりノートに感想を書き始める。
一九四八年（昭和二十三）	二十二歳	十月　体調が少しずつ良くなる。 初めての小説「村芝居」を「文藝首都」に投稿する。
一九四九年（昭和二十四）	二十三歳	一月　次女誕生。『細雪』に感銘を受ける。 十二月　七日、母、喜世死去。
一九五一年（昭和二十六）	二十五歳	五月　四日、父、猛吾死去。同月より村立保育所に保母として就職する。以後七年間勤務する。 保母仲間とガリ版刷り機関誌『草の実』を創刊（十号で終刊）。
一九五六年（昭和三十一）	三十歳	八月　『すべり台の子どもたち　しみん・しりーず二』が高知市立市民図書館より刊行される。前田とみ子の名はないが、はしがき、あとがき、本文のリライトを担当する。
一九五八年（昭和三十三）	三十二歳	三月　保育所を退職する。 四月　高知県社会福祉協議会保母会事務局に就職する。 『保母の生活白書』を出版したり、保母会単独で県大会を開催する。
一九六二年（昭和三十七）	三十六歳	二月　ＮＨＫ高知放送局主催のラジオドラマ脚本募集で「土佐真珠」が佳作三席となる。※1 三月　高知県社会福祉協議会保母会事務局を退職する。文筆活動に入る。 五月　「真珠の家」が第五回「群像」新人文学賞の予選を通過、八九七篇中五十六篇に残る。 九月　十六日、テレビドラマ処女作「女流」がＮＨＫ「女の園」第四十六話として放映される（原題「書家の群れ」）。 随筆「秋の花」が高知新聞に連載される（一日～十四日　全十二回）。 十月　短編「連」（ペンネーム前田とみ子）が第五回女流新人賞を受賞する。十日、高知市の大丸で女流新人賞受賞の祝賀パーティーが開催される。

一九六三年（昭和三十八）	三十七歳	一月　婚家を出て、借家住まいをする。 「連」が第四十八回直木賞候補になる。 二月　十三日、「仁清」がＮＨＫで放映される。 三月　協議離婚。 五月　七日、随筆「五月」が高知新聞に掲載される。
一九六四年（昭和三十九）	三十八歳	五月　「湿地帯」（ペンネーム前田とみ子）が高知新聞及び新愛媛に連載される（二十二日～十月二十六日、全一五六回）。 七月　二十四日、高知市の土電会館で「前田とみ子さんを励ます会」が開催される。 十一月　高知新聞学芸部記者宮尾雅夫氏と結婚する。
一九六六年（昭和四十一）	四十歳	一月　二十一日、夫とともに上京する。東京都杉並区下高井戸　家賃六千八百円の六畳一間のアパートに住み、「女性自身」他、週刊誌、婦人誌のライターをする。 十月　赤ちゃんとママ社に就職、月刊誌の編集にたずさわる。初任給四万五千円。 短編「舞い扇」（ペンネーム前田とみ子）が「別冊女学生の友」第一巻第三号に掲載される。
一九六八年（昭和四十三）	四十二歳	三月　赤ちゃんとママ社を退社する。 十二月　第一生命住宅（現・相互住宅）に就職。 広報編集主任としてＰＲ紙「さんるうむ」編集にたずさわる。
一九七〇年（昭和四十五）	四十四歳	八月　大田区南六郷二丁目の公団住宅に入る。
一九七二年（昭和四十七）	四十六歳	八月　私家版『櫂』（第一部）を自装で五百部刊行する。 十二月　第一生命住宅を退社する。
一九七三年（昭和四十八）	四十七歳	六月　『櫂』が第九回太宰治賞を受賞する。 七月　「櫂」が「展望」七月号に掲載される。 八月　十七日、八年ぶりに帰高。第二十三回高知市夏季大学講師を務める。 九月　心臓発作を起こし、二度にわたり入院する。 十二月　長編『櫂』（上）が筑摩書房から刊行される。
一九七四年（昭和四十九）	四十八歳	一月　「喜和」（『櫂』を改題）が芸術座で上演される（二日～二月二十八日　喜和役＝若尾文子）。 三月　長編『櫂』（下）が筑摩書房から刊行される。 短編「夜汽車」が「文芸展望」第六号に掲載される。
一九七五年（昭和五十）	四十九歳	一月　「陽暉楼」が「展望」に連載される（一月号～五十一年六月号　全十八回）。 五月　短編「卯の花くたし」が「海」五月号に掲載される。 七月　「三日月次郎」一件に就て」〈岩伍覚え書〉が「文芸展望」第十号に掲載される。 十月　「櫂」がＮＥＴテレビ（現テレビ朝日）系列で放映される（十三日～十二月二十九日　全十二回　喜和役＝若尾文子）。
一九七六年（昭和五十一）	五十歳	一月　「寒椿」が「海」に連載される（新年特大号～十二月特別号　全十二回）。 「すぼ抜きに就て」〈岩伍覚え書〉が「文芸展望」第十二号に掲載される。 七月　長編『陽暉楼』が筑摩書房より刊行される。 「満州往来に就て」〈岩伍覚え書〉が「文芸展望」第十四号に掲載される。 八月　過労のため入院する。 十月　「博徒あしらひに就て」〈岩伍覚え書〉が「文芸展望」第十五号に掲載される。 十一月　二十二日、高知市の得月楼で『陽暉楼』の「出版を祝う会」が開催される。
一九七七年（昭和五十二）	五十一歳	一月　『陽暉楼』が第七十六回直木賞候補になる。 長編『岩伍覚え書』が筑摩書房から刊行される。 四月　長編『寒椿』が中央公論社から刊行される。 十月　『寒椿』で第十六回女流文学賞を受賞する。
一九七八年（昭和五十三）	五十二歳	二月　中短編『影絵』が「すばる」第三十三号に掲載される。 六月　中短編集『影絵』が筑摩書房から刊行される。 九月　「鬼龍院花子の生涯」が「別冊文藝春秋」に連載される（第一四五号～第一四九号　全五回）。 十月　書き下し長編『絃の琴』が講談社から刊行される。 十一月　短編「彫物」が「婦人公論」十二月号臨時増刊に掲載される。
一九七九年（昭和五十四）	五十三歳	一月　短編「金魚」が「すばる」一月臨時増刊に掲載される。 二月　『絃の琴』で第八十回直木賞を受賞する。 「岩伍覚え書」がＮＨＫラジオ「日曜名作座」で放送される（十八日～四月二日　全七回　出演・森繁久彌）。 三月　「寒椿」が芸術座で上演される（五日～四月二十九日　悦子役＝浜木綿子）。

一九八四年 （昭和五十九）	一月	五十八歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』に連載され（全十六回）。 『序の舞』が帝国劇場で上演され（監督・中島貞夫　津也役＝十一月十九日　出生＝九日　全五十一回）。	
	名取裕子）。	
	二月	『加羅の春』が『婦人公論』に連載され（全十六回）。
	三月	随筆集『ちぎりの糸』が高知新聞社から刊行される。
	四月	随筆集『手しごと』が朝日新聞社から刊行される。
	大号・連載十九回・第二章まで）。	
	五月	『朱夏』が『婦人公論』に連載され（五月号＝五十六年二月特
	随筆集『母と娘』が新潮社から刊行される。	
	六月	長編『女優開花』が『婦人公論』に連載され（全十六回）。
	随筆集『ぬくもり』が講談社から刊行される。	
	七月	長編『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	随筆集『ふるさと』が講談社から刊行される。	
	八月	長編『女優開花』が『婦人公論』に連載され（全十六回）。
	随筆集『ふるさと』が講談社から刊行される。	
	九月	長編『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
一九八五年 （昭和六十）	一月	六十一歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九八六年 （昭和六十一）	一月	六十二歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
一九八七年 （昭和六十二）	一月	六十三歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九八八年 （昭和六十三）	一月	六十四歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
一九八九年 （昭和六十四）	一月	六十五歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九〇年 （平成二）	一月	六十六歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
一九九一年 （平成三）	一月	六十七歳
	二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	三月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	四月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	五月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	六月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	八月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	『風の家』が『朝日新聞』から刊行される。
	十二月	『風の家』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九二年 （平成四）	一月	六十八歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全二十巻）の刊行が開始される。
	三月	『宮尾登美子全集』（全二十巻）が毎月新聞社から刊行される。
	四月	長編『東福門院和子の涙』が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。
	五月	長編『東福門院和子の涙』が講談社から刊行される。
	六月	短編『吉原炎上』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『吉原炎上』が講談社から刊行される。
	八月	短編『吉原炎上』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『吉原炎上』が講談社から刊行される。
	十月	短編『吉原炎上』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『吉原炎上』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『吉原炎上』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九三年 （平成五）	一月	六十九歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九四年 （平成六）	一月	七十歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九五年 （平成七）	一月	七十一歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九六年 （平成八）	一月	七十二歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九七年 （平成九）	一月	七十三歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九八年 （平成十）	一月	七十四歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
一九九九年 （平成十一）	一月	七十五歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
二〇〇〇年 （平成十二）	一月	七十六歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
二〇〇一年 （平成十三）	一月	七十七歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
二〇〇二年 （平成十四）	一月	七十八歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
二〇〇三年 （平成十五）	一月	七十九歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
二〇〇四年 （平成十六）	一月	八十歳
	二日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』から刊行される。	
	二月	『宮尾登美子全集』（全十五巻）が完結する。
	三日、「序の舞」ちとせ公演』（全百五十五回）が『朝日新聞』に連載され（全三百二十回）。	
	四月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』から刊行される。
	五月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	六月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	七月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	八月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	九月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。
	十一月	短編『一絃の琴』が講談社から刊行される。
	十二月	短編『一絃の琴』が『朝日新聞』に連載され（全二百二十回）。

一月　小学館より『宮尾登美子全集』全二十巻 配信開始。

九月　高知県立文学館で「宮尾登美子その生涯と作品」展開催される（十月三日まで）。

ふるさと賞（平成十七）

十月　世田谷文学館で「地に伏したポピー 宮尾登美子展」が開催される（四日～十月三日）。

十月　九州、高知市のＲＫＣホールで講演会「宮尾登美子　私の世界」（文藝春秋の三翠園で祥伝社の対談形式）が開催される。

十一月　高知市の三翠園で菊池寛賞受賞記念祝賀会が開催される。

十二月　第五十六回菊寛賞を受賞する。

ふるさと賞（平成十一）

八十三歳

四月　十九日、高知市のＲＫＣホールで講演会「宮尾登美子　私の世界」（文藝春秋の三翠園で祥伝社の対談形式）が開催される。

十一月　高知県が日本放送出版協会から印行される。

十二月　『宮尾登美子全集』（全二十巻、文藝春秋）が刊行される。

ふるさと賞（平成十二）

八十四歳

二月　『宮尾本平家物語』が明治座で上演される（四日～二十四日　篤姫役＝内山理名）。

六月　随筆集『生きてゆく力』が海竜社から刊行される。

九月　随筆集、増補改訂版『ちょうの朱』が高知新聞社から刊行される。

十一月　文化功労者に選出される。

二月　高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子の世界展」が開催される（十一日～三月二十日）。

四月　二十三日、北海道伊達市に宮尾登美子文学記念館が開館する。

九月　仙台文学館で「宮尾登美子の世界展～生きる詞～」が開催される（十七日～十月二十日）。

十一月　高知県、中央公論に連載される（五月号～二十年三月号　全二十一回）。

ふるさと賞（平成十三）

八十五歳

一月　『宮尾本平家物語』が明治座で上演される（四日～二十四日　篤姫役＝松嶋菜々子）。

六月　随筆集『生きてゆく力』が海竜社から刊行される。

九月　別冊家庭画報『宮尾登美子　私の世界』が世界文化社から刊行される。

五月　行される。

ふるさと賞（平成十四）

七十九歳

一月　『宮尾本平家物語』全四巻『義経』を原作としたＮＨＫ大河ドラマ「義経」が放映される（九日～十二月十一日　全四十回）。

七月　高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子の世界展」が開催される（十三日～三月二十日）。

四月　仙台文学館で「宮尾登美子の世界展～生きる詞～」が開催される。

九月　東京狛江市泉の森会館で市制四十周年記念事業として「宮尾登美子展～風と登る詞～」が開催される（一日～十月二日）。

十一月　高知県、直筆原稿など約六千点が寄贈される。

ふるさと賞（平成十五）

八十歳

二月　『義経』が日本放送出版協会から印行される。

十一月　別冊家庭画報『宮尾登美子　私の世界』が世界文化社から刊行される。

十二月　『平家物語の女たち』が朝日新聞社から印行される。

ふるさと賞（平成十六）

八十一歳

七月　高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子展」が開催される。

八月　長編『蔭涼地帯』が新潮社から印行される。

九月　新装版『天璋院篤姫』（上・下）が講談社から印行される。

十月　『篤姫の生涯』が日本放送出版協会から印行される。

十一月　『篤姫』（中央公論）に連載される（五月号～二年三月号　全二十一回）。

十二月　大、宮尾雅代氏逝去。

高知県立文学館で【宮尾本平家物語】が特別公開される。

一月　高知県立文学館で【天璋院篤姫】と宮尾登美子展」が開催される（二日～三月九日）。

九月　高知県立文学館で「宮尾登美子の『義』と龍村平蔵の「美」展」が開催される（十日～五月二十七日）。

四月　子展」が開催される（二日～十四日）。

七月　軽井沢の別荘にて避暑。その後、紺丘に帰る。

十二月　三十日、老衰のため逝去。享年八十八歳。

九月　高知県立文学館で「宮尾登美子その生涯と作品」展開催される（二日～三月九日）。

ふるさと賞（平成二十）

八十八歳

一月　軽井沢の別荘にて避暑。その後、紺丘に帰る。

七月　『篤姫』（中巻）が日本放送出版協会から印行される。

八月　長編『天璋院篤姫』が新潮社から印行される。

十一月　『篤姫』（上巻）が講談社から印行される。

十二月　東京都狛江市から高知市へ住まいを移す。

高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子展」が開催される。

七月

二月　「義経」「源平の風雲児」（上・下）が講談社から印行される。

八月　新装版『天璋院篤姫』（上・下）が講談社から印行される。

九月　『篤姫』（下巻）が日本放送出版協会から印行される。

十月　『篤姫の生涯』が日本放送出版協会から印行される。

十一月　長編『蔭涼地帯』が新潮社から印行される。

十二月　大、宮尾雅代氏逝去。

高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子展」が開催される。

八十六歳

二月　「義経」「源平の風雲児」（上・下）が講談社から印行される。

八月　新装版『天璋院篤姫』（上・下）が講談社から印行される。

九月　『篤姫』（下巻）が日本放送出版協会から印行される。

十月　『篤姫の生涯』が日本放送出版協会から印行される。

十一月　長編『蔭涼地帯』が新潮社から印行される。

十二月　大、宮尾雅代氏逝去。

高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子展」が開催される。

七月

二月　「義経」「源平の風雲児」（上・下）が講談社から印行される。

八月　新装版『天璋院篤姫』（上・下）が講談社から印行される。

九月　『篤姫』（下巻）が日本放送出版協会から印行される。

十月　『篤姫の生涯』が日本放送出版協会から印行される。

十一月　長編『蔭涼地帯』が新潮社から印行される。

十二月　大、宮尾雅代氏逝去。

高知県立文学館で【宮尾本平家物語】完結記念 宮尾登美子展」が開催される。

**一

注

※1　「浮き沈み五十年」（『女のあしおと』宮尾登美子著　講談社刊）の中で「JORKのラジオの脚本募集へ応募したのが、上位に当選作がなくて私のが佳作第一位になり、（中略）これは）神戸まで取材に行った真珠の話を組み立てて「真珠の家」と題したものである」とあり、『宮尾登美子全集』十五巻の年譜では「NHK高知放送局主催のラジオドラマ脚本募集で、神戸に行き取材して書いた「真珠の家」が、佳作一席に入選する。」とあるが、昭和37（1962）年2月16日付高知新聞にNHKラジオドラマ募集の記事によると、応募作は「土佐真珠」で佳作三席となったとある。記事によると、この脚本募集はNHK高知放送局開局三十周年を記念して行われたもので、募集作は郷土ものとなっている。なお、当選作は開局記念日の昭和37（1962）年3月22日に放映するとあったが、当時の新聞のテレビ欄を調査したところ、「土佐真珠」を確認することはできなかった。

※2　昭和59（1984）年4月付近の新聞テレビ欄を調査したが、放送の確認をとることができなかった。

※3　初出の題名は「満州往来に就て」となっている。

参考資料

『宮尾登美子全集』十五巻　宮尾登美子著　1994年　1月　朝日新聞社刊

『女のあしおと』より「浮き沈み五十年」　宮尾登美子著　1981年3月　講談社刊

『歌舞伎座百年史』資料篇　金森和子編　1995年　4月　松竹・歌舞伎座刊

『芸術座25年のあゆみ』　遠藤積慶編　1984年　8月　東宝刊

『新橋と演舞場の七十年』　都市出版編　1996年　5月　新橋演舞場刊

『帝国劇場100年のあゆみ』『帝国劇場100年のあゆみ』編纂委員会編　2012年12月　東宝刊

『東映の軌跡』　東映株式会社総務部社史編纂担当編　2016年3月　東映刊

「週刊朝日」1984年4月13日号、20日号、27日号掲載「旅は豪華客船に乗ってクィーンエリザベス二世号乗船記」　宮尾登美子著

「週刊朝日」1993年9月10日号、17日号、24日号掲載「クレオパトラを歩く」　宮尾登美子著

「週刊朝日」1998年11月27日号「旧満州紀行　飲馬河五十三年目の涙」　宮尾登美子著

この他、NHKクロニクル番組表ヒストリー（データベース）、高知新聞記事検索、朝日新聞記事検索（聞蔵Ⅱ）、官報等で過去の記事を検索し、初出誌、出版物についてはできる限り原典にあたりました。

凡例

- この年譜は『宮尾登美子全集』十五巻の年譜をベースとし、上記に記した参考資料等を調査し、加筆・訂正を加えました。
- 雑誌の出版社はすべて省略しました。各雑誌の出版社は以下のとおりです。

「海」	中央公論社（現中央公論新社）
「オール讀物」	文藝春秋
「家庭画報」	世界文化社
「小説新潮」	新潮社
「小説中央公論」	中央公論社（現中央公論新社）
「週刊朝日」	朝日新聞社
「新潮」	新潮社
「すばる」	集英社
「中央公論」	中央公論社（現中央公論新社）
「展望」	筑摩書房
「婦人公論」	中央公論社（現中央公論新社）
「文藝春秋」	文藝春秋
「文芸展望」	筑摩書房
「別冊女学生の友」	小学館
「別冊文藝春秋」	文藝春秋

- 舞台は東京公演のみ掲載しました。
- 講演会・祝賀会は高知で開催された主なもののみ掲載しました。
- 初出は短編のみ、短編である旨を明記しました。
- （　）の年月日は和暦で表記してあります。
- 初出の掲載期間について、週刊誌及び新聞連載での休載は明記していません。

出版目録（小説）

①「村芝居」
未発表　1948（昭和23）年6月脱稿
収録／『菊籬』　1995（平成7）年4月　文藝春秋刊
『菊籬』（文春文庫）　1998（平成10）年1月　文藝春秋刊

②「連」
初出／「婦人公論」11月号掲載　1962（昭和37）年11月
収録／『影絵』　1978（昭和53）年6月　筑摩書房刊
『影絵』（集英社文庫）　1981（昭和56）年10月　集英社刊
『夜汽車・岩伍覚え書』（ちくま文庫）　1986（昭和61）年2月　筑摩書房刊
『女性作家シリーズ13　三浦綾子／宮尾登美子』　1998（平成10）年11月　角川書店刊
※『櫂』新装版上巻の原本未確認

③「水の城」
初出／「小説中央公論」12月特大号掲載　1962（昭和37）年12月
収録／『菊籬』　1995（平成7）年4月　文藝春秋刊
『菊籬』（文春文庫）　1998（平成10）年1月　文藝春秋刊

④「湿地帯」
初出／「高知新聞」朝刊に連載　全156回　1964（昭和39）年5月22日～10月26日
収録／『湿地帯』　2007（平成19）年8月　新潮社刊
『湿地帯』（新潮文庫）　2010（平成22）年6月　新潮社刊

⑤「舞い扇」
初出／「別冊女学生の友」第1巻第3号　1966（昭和41）年10月

⑥「櫂」
初出／宮尾登美子自作本『櫂』第一部　1972（昭和47）年8月　私家版
「展望」7月号掲載　1973（昭和48）年7月　※第一部のみ
収録／『櫂』上　1973（昭和48）年12月　筑摩書房刊
『櫂』下　1974（昭和49）年3月　筑摩書房刊
『櫂』上（中公文庫）　1978（昭和53）年4月　中央公論社刊
『櫂』下（中公文庫）　1978（昭和53）年5月　中央公論社刊
『櫂』上・中・下（大活字本シリーズ）　1984（昭和59）年4月　埼玉福祉会刊
『櫂』上・下　新装版　1984（昭和59）年10月　筑摩書房刊※
『櫂』（全）（ちくま文庫）　1985（昭和60）年12月　筑摩書房刊
『櫂』（全）（中公文庫）　1990（平成2）年4月改版　中央公論新社刊
『櫂』（新潮文庫）　1996（平成8）年11月　新潮社刊
『櫂』（新潮文庫）　2005（平成17）年11月16刷改版　新潮社刊

⑦「夜汽車」
初出／「文芸展望」第6号　1974（昭和49）年7月
収録／『影絵』　1978（昭和53）年6月　筑摩書房刊
『影絵』（集英社文庫）　1981（昭和56）年10月　集英社刊
『夜汽車・岩伍覚え書』（ちくま文庫）　1986（昭和61）年2月　筑摩書房刊
『夜汽車』（豆本）　1986（昭和61）年8月　未来工房刊

⑧「陽暉楼」
初出／「展望」に連載　全18回　1975（昭和50）年1月～1976（昭和51）年6月
収録／『陽暉楼』　1976（昭和51）年7月　筑摩書房刊
『陽暉楼』（中公文庫）　1979（昭和54）年9月　中央公論社刊
『陽暉楼』新装版　1983（昭和58）年6月　筑摩書房刊
『陽暉楼』（ちくま文庫）　1987（昭和62）年12月　筑摩書房刊
『陽暉楼』（文春文庫）　1998（平成10）年3月　文藝春秋刊

⑨「卯の花くたし」
初出／「海」5月号　1975（昭和50）年5月
収録／『影絵』　1978（昭和53）年6月　筑摩書房刊
『影絵』（集英社文庫）　1981（昭和56）年10月　集英社刊
『夜汽車・岩伍覚え書』（ちくま文庫）　1986（昭和61）年2月　筑摩書房刊
『卯の花くたし』（豆本）　1987（昭和62）年6月　未来工房刊
『女性作家シリーズ13　三浦綾子／宮尾登美子』　1998（平成10）年11月　角川書店刊

⑩「岩伍覚え書」
初出／「三日月次郎」件に就て」「文芸展望」第10号　1975（昭和50）年7月
「すば抜きに就て」　「文芸展望」第12号　1976（昭和51）年1月
「満州往来に就て」　「文芸展望」第14号　1976（昭和51）年7月
「博徒あしらひに就て」「文芸展望」第15号　1976（昭和51）年10月
収録／『岩伍覚え書』　1977（昭和52）年1月　筑摩書房刊
『岩伍覚え書』（集英社文庫）　1979（昭和54）年9月　集英社刊
『岩伍覚え書』新装版　1985（昭和60）年2月　筑摩書房刊
『夜汽車・岩伍覚え書』（ちくま文庫）　1986（昭和61）年2月　筑摩書房刊
『昭和文学全集』第26巻　1988（昭和63）年10月　小学館刊
『岩伍覚え書』（角川文庫）　2000（平成12）年1月　角川書店刊
『コレクション　戦争と文学　16　満洲の光と影』　2012（平成24）年2月　集英社刊
※「満州往来について」収録
『岩伍覚え書』（集英社文庫）　2016（平成28）年2月改訂新版　集英社刊

⑪「寒椿」
初出／「婦人公論」に連載　全16回　1980(昭和55)年1月～1981(昭和56)年4月
収録／『婦人公論』　1981年4月臨時増刊
『菊籬』(文春文庫)　1983(昭和58)年1月
『菊籬』(新潮文庫)　1986(昭和61)年1月
『菊籬』(新潮社)　1988(昭和63)年1月

⑫「影絵」
初出／「すばる」　第33号　1987(昭和53)年2月
収録／『影絵』(集英社文庫)　1981(昭和56)年10月
『夜光虫・岩伍覚え書』(ちくま文庫)　1986(昭和61)年2月

⑬「鬼龍院花子の生涯」
初出／「別冊文藝春秋」に連載　全5回　1978(昭和53)年9月～1979(昭和54)年9月
収録／『鬼龍院花子の生涯』　1980(昭和55)年1月
『鬼龍院花子の生涯』(文春文庫)　1982(昭和57)年6月
『鬼龍院花子の生涯』(中公文庫)　1988(平成元)年1月
『鬼龍院花子の生涯』(文春文庫)新装版　2001(平成13)年3月

⑭「二絃の琴」
初出／「二絃の琴」　第33号　1978(昭和53)年10月
収録／『二絃の琴』(講談社文庫)　1982(昭和57)年7月
『二絃の琴』上・中・下(大活字本シリーズ)　1984(昭和59)年10月
『二絃の琴』新装版　2000(平成12)年2月
『二絃の琴』(講談社文庫)新装版　2008(平成20)年4月

⑮「彫物」
初出／「婦人公論」　11月号臨時増刊　1979(昭和54)年11月
収録／『菊籬』　1979(昭和54)年4月
『菊籬』(文春文庫)　1983(昭和58)年4月
『菊籬』(新潮文庫)　1986(昭和61)年1月
『菊籬』(新潮社)　1988(昭和63)年1月

⑯「金魚」
初出／「すばる」　1月臨時増刊　1979(昭和54)年1月
収録／『菊籬』　1979(平成7)年4月
『菊籬』(文春文庫)　1983(平成8)年9月
『菊籬』(新潮文庫)　1986(平成10)年1月
『菊籬』(新潮社)　1988(平成10)年1月

⑰「伽羅の香」
初出／「婦人公論」に連載　全16回　1980(昭和55)年1月～1981(昭和56)年4月
収録／『伽羅の香』(中公文庫)　1983(昭和58)年1月
『伽羅の香』(中公文庫)　1986(昭和61)年1月
『伽羅の香』(中公文庫)　1988(昭和63)年1月
『伽羅の香』(中公文庫)　1989(平成元)年6月
『伽羅の香』(中公文庫)　1994(平成6)年7月
改版　中央公論社
収録／『伽羅の香』(中公文庫)　1998(平成10)年12月

⑱「朱夏」
初出／「すばる」に連載　全46回　※1980(昭和55)年1月～1981(昭和56)年4月
収録／『朱夏』上・下　1982年4月
『朱夏』上・下(集英社文庫)　1986(昭和61)年6月
『朱夏』全4巻(大活字本シリーズ)　1990(平成2)年12月
『朱夏』(新潮文庫)　1990(平成2)年12月
『朱夏』(新潮文庫)　2006(平成18)年4月
『菊籬』(文春文庫)　1999(平成11)年6月
『菊籬』(新潮文庫)　2001(平成13)年4月
『菊籬』(新潮社)　2002(平成14)年3月

⑲「自害」
初出／「オール讀物」　9月特大号　1980(昭和55)年9月
収録／『菊籬』(文春文庫)　1999(平成11)年4月
『失われた空日本人の涙と心の名作8選』　2010年10月

⑳「序の舞」
初出／朝日新聞夕刊に連載　全392回　1981(昭和56)年5月11日～1982(昭和57)年8月28日
収録／『序の舞』上・下　1982(昭和57)年11月　朝日新聞社
『序の舞』(中公文庫)　1983(昭和58)年1月　中央公論社
『序の舞』上・下(朝日文庫)　1985(昭和60)年1月　朝日新聞社
『序の舞』全4巻(大活字本シリーズ)　1987(昭和62)年4月　埼玉福祉会
『序の舞』(新潮文庫)　1988(昭和63)年1月　新潮社
『序の舞』(新潮社)　1988(昭和63)年1月　新潮社

㉑「菊籬」
初出／「海」　7月特別号　1982(昭和57)年7月
収録／『菊籬』(文春文庫)　1983(昭和58)年1月　文藝春秋
『女性作家シリーズ13　三浦綾子／宮尾登美子』　1990(平成2)年1月　文藝春秋
『菊籬』(文春文庫)　1994(平成6)年1月　文藝春秋
『菊籬』(新潮文庫)　1998(平成10)年1月　新潮社
『菊籬』(新潮社)　2000(平成12)年1月　新潮社

㉒「天璋院篤姫」
初出／日本経済新聞夕刊に連載　全324回　※1983(昭和58)年1月～1984(昭和59)年5月1日
収録／『天璋院篤姫』上・下　1984年9月　講談社
『日本歴史文学館28』　1988年2月　講談社刊
『天璋院篤姫』上・下(講談社文庫)　1987(昭和62)年11月　講談社
『天璋院篤姫』全4巻(大活字本シリーズ)　1990(平成2)年12月　講談社
『天璋院篤姫』新装版　2007(平成19)年9月　講談社
『天璋院篤姫』上・下　新装版　2007(平成19)年3月　講談社

㉓「春燈」
初出／「新潮」に連載　全26回　※1980(昭和55)年1月～1982(昭和57)年12月
収録／『春燈』　1983年1月　新潮社
『春燈』(新潮文庫)　1986(昭和61)年3月　新潮社
『春燈』上・中・下(大活字本シリーズ)　1990(平成2)年10月　埼玉福祉会
『春燈』(新潮文庫)　1994(平成6)年7月　新潮社
『春燈』(新潮文庫)新装版　2015年2月　新潮社

㉔「松風の家」
初出／「文藝春秋」に連載　全27回　1987(昭和62)年1月～1989(平成元)年3月
収録／『松風の家』上・下(文春文庫)　1992(平成4)年9月　文藝春秋

㉕「千代丸」
初出／「小説新潮」　第41巻第9号　1987(昭和62)年9月
収録／『菊籬』　1987(平成7)年4月　文藝春秋
『菊籬』(文春文庫)　1990(平成2)年1月　文藝春秋

㉖「きのね」
初出／朝日新聞朝刊に連載　全438回　1989(平成元)年11月22日～1991(平成3)年9月1日
収録／『きのね』上・下　1990(平成2)年5月　朝日新聞社
『きのね』(朝日文芸文庫)　1995(平成7)年2月　朝日新聞社
『きのね』全4巻(大活字本シリーズ)　1998(平成10)年4月　埼玉福祉会
『きのね』(新潮文庫)　1999(平成11)年4月　新潮社
『〈新編〉日本女性文学全集9』　2019(令和元)年6月　六花出版

㉗「菊亭八百善の人びと」
初出／読売新聞朝刊に連載　全378回　1990(平成2)年2月27日～1991(平成3)年3月20日
収録／『菊亭八百善の人びと』　1991(平成3)年10月　新潮社
『菊亭八百善の人びと』(新潮文庫)　1994(平成6)年12月　新潮社
『菊亭八百善の人びと』上・下(中公文庫)　2006(平成18)年3月　中央公論新社

㉘「東福門院和子の涙」
初出／「家庭画報」に連載　全36回　1990(平成2)年4月～1993(平成5)年3月
収録／『東福門院和子の涙』　1993(平成5)年4月　講談社
『東福門院和子の涙』(講談社文庫)　1996(平成8)年9月　講談社
『レジェンド歴史時代小説　東福門院和子の涙』上・下(講談社文庫)　2016(平成28)年2月　講談社

㉙「蕨」
初出／毎日新聞朝刊に連載　全384回　1990(平成2)年4月26日～1991(平成3)年3月26日
収録／『蕨』上・下　1991年9月
『蕨』上・下(中公文庫)　1994(平成6)年12月　日本芸術図書館製作
『蕨』上・下(角川文庫)　1995(平成7)年1月　角川書店
『蕨』全4巻(大活字本シリーズ)　1998(平成10)年1月　埼玉福祉会

㉚「クレオパトラ」
初出／朝日新聞日曜版に連載　全124回　1996(平成8)年3月31日～1999(平成11)年3月
収録／『クレオパトラ』上・下　1999年9月　朝日新聞社
『クレオパトラ』特装版　限定250部　1999年12月
『クレオパトラ』上・下(朝日文庫)　2001(平成13)年6月
『クレオパトラ』上・下(新潮文庫)　2014年6月　新潮社

㉛「宿毛にて」
初出／「つばき」　別冊文藝春秋2008号　1999(平成11)年7月
収録／『菊籬』(文春文庫)　1999(平成11)年4月　文藝春秋
『山川よ』　別冊文藝春秋2009号　2000(平成12)年1月　文藝春秋

㉜「天涯の花」
初出／高知新聞他各地方紙に順次連載　全180回　1998(平成10)年1月25日～1999(平成11)年2月22日(高知新聞での連載期間)
収録／『天涯の花』(集英社文庫)　2000(平成12)年1月　集英社
『天涯の花』　2000(平成12)年9月　集英社

㉝「月と椿平」
初出／「すばる」10月号　1997(平成9)年10月

㉞「仁淀川」
初出／「新潮」に連載　全24回　※1998(平成10)年1月～2000(平成12)年2月
収録／『仁淀川』　2000(平成12)年12月　新潮社
『仁淀川』(新潮文庫)　2003(平成15)年9月　新潮社
『仁淀川』上・下(大活字本シリーズ)　2006(平成18)年11月　埼玉福祉会

㉟「宮尾本 平家物語」
初出／「週刊朝日」に連載　全201回　1999（平成11）年11月～2003（平成15）年11月
収録／『宮尾本 平家物語』1（青龍之巻）　2001（平成13）年6月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』2（白虎之巻）　2002（平成14）年4月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』3（朱雀之巻）　2003（平成15）年4月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』4（玄武之巻）　2004（平成16）年4月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』1（青龍之巻）（朝日文庫）　2006（平成18）年4月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』2（白虎之巻）（朝日文庫）　2006（平成18）年5月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』3（朱雀之巻）（朝日文庫）　2006（平成18）年6月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』4（玄武之巻）（朝日文庫）　2006（平成18）年7月　朝日新聞社刊
『宮尾本 平家物語』1（青龍之巻）（文春文庫）　2008（平成20）年10月　文藝春秋刊
『宮尾本 平家物語』2（白虎之巻）（文春文庫）　2008（平成20）年11月　文藝春秋刊
『宮尾本 平家物語』3（朱雀之巻）（文春文庫）　2008（平成20）年12月　文藝春秋刊
『宮尾本 平家物語』4（玄武之巻）（文春文庫）　2009（平成21）年1月　文藝春秋刊

㊱「義経」
収録／『義経』　2004（平成16）年11月　日本放送出版協会刊
『義経』（新潮文庫）　2007（平成19）年5月　新潮社刊

㊲「錦」
初出／「中央公論」に連載　全22回　2006（平成18）年5月～2008（平成20）年3月
※2008年2月は休載
収録／『錦』　2008（平成20）年6月　中央公論新社刊
『錦』（中公文庫）　2011（平成23）年11月　中央公論新社刊
『錦』上・下（大活字本シリーズ）　2013（平成25）年6月　埼玉福祉会刊

㊳「貧乏感懐」（生前未発表）
初出／「オール讀物」　2026（令和8）年3・4月

『宮尾登美子全集』全15巻
1992（平成4）年11月～1994（平成6）年1月　朝日新聞社刊

収録作品
第1巻　櫂
第2巻　春燈
第3巻　朱夏
第4巻　岩伍覚え書・寒椿
第5巻　陽暉楼・連
第6巻　鬼龍院花子の生涯・夜汽車・卯の花くたし・影絵
第7巻　一絃の琴
第8巻　伽羅の香
第9巻　序の舞
第10巻　天璋院篤姫
第11巻　松風の家
第12巻　きのね
第13巻　金魚・菊簪・千代丸・彫物・自害・水の城・村芝居・楊梅の熟れる頃・花のきもの
第14巻　自選文学エッセー
第15巻　日記・年譜・著書目録

『宮尾登美子 電子全集』全20巻
2018（令和元）年1月～2019（令和2）年8月　小学館配信

収録作品
第1巻　櫂／岩伍覚え書
第2巻　陽暉楼／寒椿
第3巻　鬼龍院花子の生涯／楊梅の熟れる頃
第4巻　春燈／湿地帯
第5巻　朱夏／仁淀川
第6巻　一絃の琴／母のたもと
第7巻　伽羅の香／松風の家
第8巻　序の舞／手とぼしの記
第9巻　錦／美しきものへの巡礼
第10巻　きのね／日記（昭和41年～47年）
第11巻　菊亭八百善の人びと／日記（昭和48年～54年）
第12巻　蔵／天涯の花
第13巻　天璋院篤姫／篤姫の生涯
第14巻　東福門院和子の涙／クレオパトラ
第15巻　宮尾本 平家物語一 青龍之巻／宮尾本 平家物語二 白虎之巻
第16巻　宮尾本 平家物語三 朱雀之巻／宮尾本 平家物語四 玄武之巻
第17巻　平家物語の女たち／義経／影絵／菊籬／舞い扇
第18巻　花のきもの／きものがたり／小さな花にも蝶／大人の味
第19巻　女のあしおと／もう一つの出会い／地に伏して花咲く／女のこよみ／生きてゆく力
第20巻　つむぎの糸／わたしの四季暦／記憶の断片／はずれの記

映像化・舞台化された宮尾作品

「櫂」
舞台　1974年1月～2月　「喜和」芸術座で上演　喜和役＝若尾文子
1986年5月　新派により新橋演舞場で上演　喜和役＝水谷良重
1989年1月～2月　芸術座で上演　喜和役＝十朱幸代
映画　1985年1月　東映で映画化　喜和役＝十朱幸代
テレビ　1975年10月～12月　NETテレビ（現テレビ朝日）系列で放映　喜和役＝若尾文子
1999年5月　NHKBSで放映　喜和役＝松たか子

「夜汽車」
映画　1987年1月　東映で映画化　露子役＝十朱幸代（原作「夜汽車」「岩伍覚え書」）

「岩伍覚え書」
ラジオ　1979年2月～4月　NHKラジオ「日曜名作座」で放送　出演・森繁久彌

「寒椿」
舞台　1979年3月～4月　芸術座で上演　悦子役＝浜木綿子
映画　1992年5月　東映で映画化　岩伍役＝西田敏行（原作「寒椿」「岩伍覚え書」）

「一絃の琴」
舞台　1979年5月　新派により新橋演舞場で上演　苗役＝水谷良重・波乃久里子のダブルキャスト
1981年3月　帝国劇場で上演　苗役＝司葉子
テレビ　2000年3月～7月　NHKで放映　苗役＝田中美里

「序の舞」
ラジオ　1983年7月～9月　NHKラジオ「日曜名作座」で放送　出演・森繁久彌
舞台　1984年2月　帝国劇場で上演　津也役＝山本富士子
映画　1984年1月　東映で映画化　津也役＝名取裕子
テレビ　1984年1月　テレビ朝日系列で放映　津也役＝大原麗子

「陽暉楼」
舞台　1984年5月　新派により新橋演舞場で上演　桃若役＝水谷良重
1988年1月～2月　帝国劇場で上演　胡遊役＝浜木綿子　桃若役＝大空真弓
映画　1983年9月　東映で映画化　勝造役＝緒形拳　房子役＝池上季実子
テレビ　1984年8月～9月　TBS系列で放映　房子役＝名取裕子

「鬼龍院花子の生涯」
舞台　1984年12月　新派により歌舞伎座で上演　松恵役＝水谷良重
映画　1982年6月　東映で映画化　鬼龍院政五郎役＝仲代達矢　松恵役＝夏目雅子
テレビ　1984年7月～8月　TBS系列で放映　松恵役＝池上季実子
2010年6月　テレビ朝日系列で放映　松恵役＝観月ありさ

「天璋院篤姫」
舞台　1984年10月　東京宝塚劇場で上演　篤姫役＝山本富士子
2010年2月　明治座で上演　篤姫役＝内山理名
テレビ　1985年1月～12月　テレビ朝日系列で放映　篤姫役＝佐久間良子
2008年1月～12月　NHK大河ドラマ「篤姫」放映　篤姫役＝宮﨑あおい

「松風の家」
舞台　1987年11月　帝国劇場で上演　由良子役＝佐久間良子
テレビ　1988年1月　テレビ朝日系列で放映　由良子役＝竹下景子

「春燈」
舞台　1990年3月～4月　芸術座で上演　綾子役＝古手川祐子
テレビ　1989年1月　テレビ朝日系列で放映　綾子役＝南野陽子
1997年9月～10月　NHKBSで放映　綾子役＝松たか子

「菊亭八百善の人びと」
舞台　1991年11月～12月　芸術座で上演　汀子役＝山本陽子
テレビ　1994年2月　テレビ朝日系列で放映　汀子役＝賀来千香子
2004年3月～5月　NHKで放映　汀子役＝夏川結衣

「伽羅の香」
舞台　1992年1月～2月　芸術座で上演　葵役＝十朱幸代

「蔵」
舞台　1995年3月～4月　芸術座で上演　烈役＝沢口靖子
1997年3月～4月　芸術座で再演　烈役＝沢口靖子
1999年1月～2月　芸術座で再々演　烈役＝沢口靖子
映画　1995年10月　東映で映画化　佐穂役＝浅野ゆう子　烈役＝一色紗英
テレビ　1995年6月～7月　NHKBSで放映　烈役＝松たか子

「クレオパトラ」
舞台　1997年9月～10月　日生劇場で上演　クレオパトラ役＝大地真央

「天涯の花」
舞台　1999年1月　新橋演舞場で上演　珠子役＝松たか子
テレビ　1999年11月　NHKで放映　珠子役＝須藤理彩

「仁淀川」
舞台　2002年9月～10月　芸術座で上演　綾子役＝沢口靖子

「宮尾本 平家物語」
テレビ　2005年1月～12月　NHK大河ドラマ「義経」放映　義経役＝滝沢秀明
（原作『宮尾本 平家物語』全四巻、『義経』）

宮尾登美子文庫資料（草稿、ノート）

高知県立文学館の宮尾登美子文庫は作家ご本人及びご遺族からご寄贈いただいた創作ノート、原稿、愛用品、蔵書、写真などを収蔵している。

■草稿■

●小説原稿

「天璋院篤姫」完成稿　2冊
「櫂」草稿「第2部～第4部」
「一絃の琴」「第3部冒頭草稿の一部」
「一絃の琴」「下書き草稿③」
「一絃の琴」「下書き草稿①」
「一絃の琴」「下書き草稿②」
「きのね」
「宿毛にて」第一稿（一）～（三）
「影絵」
「金魚」
「鬼龍院花子の生涯」完成稿
「序の舞」完成稿
「クレオパトラ」完成稿
「平家物語」第一稿（青龍之巻）
「宮尾本平家物語」完成原稿（1～201回）4冊
「宮尾本平家物語」校正ゲラファックス
「宮尾本平家物語」校正ゲラ（201回分）
コピー「平家物語」（8－14・51－54回分）
「義経」
「仁淀川」
「宿毛にて」（一）つづき
「月と権平」校正ゲラ
「天涯の花」手入れ原稿
コピー「天涯の花」第一章（13）～（18）
「錦」
下書き等一式（「錦」他）
「錦」校正ゲラ　連載1～4回
「その一 秦泉寺の里」※前田とみ子用箋
「湿地帯」校正ゲラ
『湿地帯』校正ゲラ　再校控
「序の舞」完成稿　※文庫外
「天涯の花」　※文庫外

●前田登美子名原稿

「台所の窓から（1）（2）（3）（4）（5）（6）（7）」
「藤村家の法要の日は…」
「前里日記（1）霊南坂」
「あのひととあたし」
「手記」
「木枯らし」
「洪水圏」
「真珠」
「あんまさんの話」
「成人のみなさまへ」
「初夢」
「土佐自慢」（一）～（四）
「水のなやみ」
「国鉄への疑問」（一）～（三）
「市民の交通生活」（一）～（三）
「第二章 佐渡の能楽」
題名なし「今ここで久美子の決心を翻えさせないことには…」
「筆ならし」

●エッセイその他の原稿

「すがすがしい画風」
「選評」
「母のたもと」
「永遠の生への願望から生み出された芸術」
「関寂・依水園の庭」
「私の元旦」
「父と娘のせつなさよ」
「妓棲文化の再現」
「女性忘るべからず」
「連載を終えて」
「はずれの記」
「ごめんね、水城さん」

題名なし「伊達で暮しはじめて今年で四年。…」
題名なし「人の終りを手厚く看取り、…」
題名なし「一週間ほど、うちにこもっているあいだに…」
題名なし「小説クレオパトラを書いたあと…」
題名なし「私の色紙嫌いなのは…」
題名なし「日本はまわりを海に囲まれ、…」
題名なし「もうずい分と前の話になるが…」
題名なし「透けたもの、薄いものに対する私の憧憬ときたら…」
題名なし「珊瑚は私の故郷土佐の特産物で…」
題名なし「このごろ、「随筆を」といわれると…」
題名なし「「蔵」の本文が終ったのが四月二十五日の日曜日…」
題名なし「「つぶやく人」プロセスも目的も…」
「宇野さんとの対談」
「埋立工事」及び創作メモ
「早春盆梅香る」校正ゲラ
「想い出の時計たち」校正ゲラ
「想い出の時計たち」
「私が描いた京おんな」校正ゲラ（ベタ組み）
「平家物語大事典」推薦文
「六月の雨」
「史実と粉飾のはざま」
「生まれて初めての写経」校正ゲラ（ベタ組み）
「人形遊び」
「連載『宮尾本平家物語』を終えて」校正ゲラ（ベタ組み・FAX）
「連載『宮尾本平家物語』を終えて」校正ゲラ（FAX）
「私の好きなもの」校正ゲラ（FAX）
「義経」座談会『源平「妻」合戦』校正ゲラ
「みつめる昭和八十年」1～32回（5・29回欠）
題名なし「思いもかけずこのたび『湿地帯』を刊行して…」
（跋文下書き）
「あとがき」（『錦』）下書き
「「錦」うらばなし」
「絵画とも見まがう錦」
「振り返る日々」

「蔵」の春秋（1）～（25）
「きものがたり」
「着物あれこれ」
「姫街道と私」
「落ち穂を拾った三十年の随筆」（本では「茫々三十年の歳月」）
「とりあえずの生前展」
「藤あや子さんの「桃若」に期待」
コピー「百周年に拍手」
「平家納経の美」
「緊張の醍醐味」
「日記のすすめ」
「一陣のさわやかな風」
「作者のことば「天界の花」（天涯の花）」
「せつない男よ、水城さん」
「広辞苑」
「自己変革に挑む草笛さん」
「大きな期待と信頼」
「あらためて、感無量」
「照れやのお母さん」
コピー「田代彩子さんのみたまの前に」
「葛籠のなかのいとおしきもの」
「呉服屋「三條」のこと」
「永遠のきもの－特別装幀愛蔵版に寄せて」
題名なし「三月二十八日（火）とんよりした空…」
「智内兄助「蔵」さし絵画集」序文草稿
「新しい義経像を求めて」
「固い結束の女房たち」
「亡魂の鎮めとして」
題名なし「これまで私自身をモデルにした綾子の物語を…」
「文語体の流麗さ」
題名なし「私の小説、ドラマやお芝居にたくさんして頂き…」
題名なし「今住んでいる北海道に移って来てまもなくだったと思うが…」

「私の物語に生きつづける女性たち」（原稿は題名なし）
「ふるさとの水」
題名なし「どれも長篇のせいもあるが、私の作品は…」（「絃の琴」関係）
「立春大吉」
題名なし「戦前、南海一とうたわれた名楼「陽暉楼」は…」
題名なし「中上健次さんの追悼文を…」
題名なし「以前、いまは亡き昭和天皇の侍従長…」
「花のきもの（四）藤」　※文庫外
「花のきもの」　※文庫外
「句集　旅びと序文」　※文庫外
「世界写俳紀行　旅たび序文」　※文庫外
下書き他

■ノート■

●創作ノート類

創作メモ「天涯の花」
「平家物語」創作ノート
創作ノート「熊野三山詣で」
「陽暉楼」創作ノート（1974・夏）
「櫂」創作ノート（櫂2・メモ）
「平家物語」創作資料ノート（八）（9冊）
「平家物語」創作ノート（男4）
「平家物語」創作ノート（佐伯先生テープ）
「平家物語」創作ノート（平家物語メモ）
「平家物語」創作ノート（源家）
「一絃の琴」「櫂」取材ノート
創作ノート「創作2」
創作ノート「うるし・三味線」
創作ノート「年譜」
創作ノート「茶」
創作ノート「取材ノート」（1974・6月以降）
（鬼龍院花子の生涯）
創作ノート「村長とのトラブル」
創作ノート「中東メモ」
創作ノート「漢文入門」
創作ノート「薬価問題メモ」
創作ノート「日本のやきもの」
創作ノート「沖の島メモ」
創作ノート「序の舞」（上村松園メモ）
習作ノート「わたしの土佐」
習作ノート「No.1「テルさんの結婚」「父への手紙」」
習作ノート「随想録」
習作ノート「No.1ざれごと浦戸湾の下書き」
創作ノート　題名なし
創作・習作ノート「農業土木」「父への手紙」
創作ノート「乱礁」
創作ノート「手とぼし帖」
創作ノート「北見志保子」
創作ノート「佛教関係」
習作ノート「長い間この町に住んでいたら…」
読書録ノート
保育所時代のノート

岸田猛吾　日記帳
紹介人名詳細筆記簿
人名和簿
修学日記　他

宮尾登美子 生誕一〇〇年記念
生きてゆく力

謝辞

展覧会及び図録制作にあたり、
さまざまなご協力を賜りました。
関係者各位ならびに関係諸機関に、
深く感謝し、心より御礼を申し上げます。

宮尾環　宮尾おと

英保迪惠
裏千家淡交会 高知支部
尾形明子
岸田康彦
嶋岡　晨
正曲一絃琴白鷺会
谷川泰宏
檀　ふみ
長谷川三千子
山本一力
（五十音順・敬称略）

朝日新聞社
株式会社宇野千代
高知県史編さん活用課
高知県立図書館
高知市立市民図書館
高知新聞社
国立公文書館
新潮社
中央公論新社
日本近代文学館

引用文中等に、今日においては不適切と思われる表現が見られる場合があります。
当館はこのような表現を容認するものではありませんが、当時の時代背景及び社会情勢を伝えることが文学の使命でもあると考えそのままとしました。

「宮尾登美子 生誕一〇〇年記念
生きてゆく力」図録

初版　令和8年9月30日発行

編集・発行　高知県立文学館
（公益財団法人 高知県文化財団）
担当／学芸課　岡本美和
〒780-0850 高知県高知市丸ノ内1-1-20
TEL 088-822-0231　FAX 088-871-7857
https://www.kochi-bungaku.com
e-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

デザイン・印刷　株式会社クリーム